

SEIJU

成・寿

春考号

1997年
第 27 卷

伊藤三喜庵先生追悼号



三日月宗常の御時、田舎形大足籠(おんあし) 御衣(おんぎ)

おんぎ

おんあし

三日月庵

脚胖

わらじ

衣(お) 簞杖(たね) 但(た) 導師(だんし) が持(も) つ



ありし日の伊藤三喜庵先生



檀徒総代として、善光寺の行事には毎回欠かさず出席されました。

講演・私の墨画論

平成7年10月6日





アトリエにて





スリランカの旅

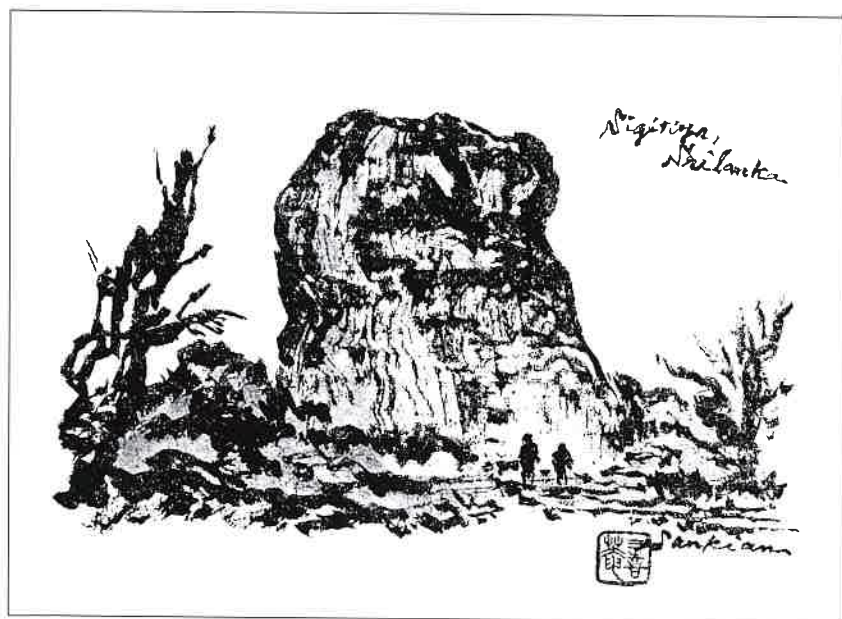
平成4年10月26日～11月2日







伊藤先生ご夫妻を囲んで駒沢学園幹部とともに
～駒沢学園照心館～



カラ — ありし日の伊藤三喜庵先生
追悼 ● かけがえない人生の父 — 伊藤喜二郎先生を想う……………黒田 武志

● 沙門三喜庵……………東 隆真
● 偲ぶ……………中村 治雄

カラ — 絵本『ジョン万次郎の生涯』より……………33
● 伊藤三喜庵の世界……………41

特別寄稿 ● インド石窟の旅……………伊藤 博・伊藤 宣
特別読物 ● 日本語化したインドのことは……………町田 靖治

● 法隆寺金堂修正会に随喜して……………阿部 慈園
● 「み仏様がお見通し」 — 光真寺のおばあちゃん……………菊地 展江

● 米国加州佛真寺に於ける参禅生活……………遠藤 博因
● ガングーリ先生……………宇野 恭章

● 私の一癖好きな、居場所……………黒川 麻子
● 横浜善光寺留学僧育英会の第十一回総会を開催……………104

● 『横浜善光寺留学僧育英会論文集VOL.11』留学・求法・弘法の旅……………阿部 慈園
● 横浜善光寺留学僧育英会・新育英生三人に辞令……………114

● 第13回育英生論文 久間泰賢、山口菜生子、洪 在成……………118
カラ — 善光寺節分会……………133

● 節分は心新たに生きていくことを誓う日 — 善光寺節分会に因み……………黒田 武志
読者のたよりの143 声156 留学育英生からのたよりの169 ご寄付御礼176

題字・イラスト 伊藤三喜庵

巻頭言

二十一世紀に後二年と迫まって参りました。—— 昨年の秋に地元上大岡駅にデパートとシヨッピングセンターが完成し、駅舎も一変し、住み良い街づくりが出来ました。市民の方々、日野公園墓地や善光寺に参拝される方には大変便利になりました。又「横浜五輪」、二〇〇八年に夏季五輪の開催地としての計画が発表され、明るいニュースにつつまれております。

さて、今回の「成寿」は故伊藤喜三郎（三喜庵）先生の特集号とさせていただきますました。伊藤先生は日本建築界の重鎮であり、伊藤喜三郎建築事務所会長、東京都建築協会名誉会長として、又南画界にあつては自由画壇理事長、日本南画院副理事長の要職につかれ、一九七一年には、文部大臣賞を受賞されました。一九九一年より二年間、読売新聞連載小説「椿と花木」の挿絵を描かれ、多くの方々の評価を受けました。

善光寺では釈迦殿の御設計をいただき、善光寺檀頭として多年にわたり、仏法の拳揚きょうりやう、寺門百世の栄を期すべき計をたてて下さり、機関紙「成寿」の表紙、カツト等をお描き下さいました。

先生は生涯、「自ら勉めつと、自ら励みはげ、大いに空拳くうけんを伸ばし、本来の面目を現前し、自己の心地を開眼し、そして裕ゆたかにして惜おしまず、富んで驕おごらず、清浄法身、清浄光を放つた」生活を送られた方であります。何よりも人間としての内なる充実をとげられたお一人であつたと信じております。

又、「椿と花水木」の作者の津本陽先生は「伊藤先生の墨絵には、お人柄があらわれるといふのか、見る者は想像力を刺激され画中の情景の中へ包みこまれるような思いに誘われる。おだやかなうちに凜りんこ乎とした風韻ふういんがにじみでている。」と言われております。

善光寺は、二十一世紀に向つて、人類の豊かな未来の寺としての使命を果たし、仏法交流、世界平和を願い、多くの方々に光明を与え、喜ばれるよう、精進、努力してゆきたいと思ひます。

■追悼■

かけがえのない人生の父

——伊藤喜三郎先生を想う——

善光寺住職 黒田 武志

私と伊藤喜三郎先生が出会ったのは、昭和四

十一年のことです。伊藤先生は五十二歳、私は二十九歳でした。あれからもう、三十年以上の月日が流れたとは、なんだか信じられないような気持ちです。はじめてお会いしたときの印象から、ともに過ごし、そして育てていただいた日々の数多くの感動まですべて、つい昨日のことのようにはっきりと思い出すことができるの

ですから…。

私は全国托鉢行脚をすませ昭和三十八年より、大本山總持寺の特別僧堂に安居を致しました。昭和四十一年修行の一環として、同じく若い僧であった森山大行老師や林秀頼老師、平井大心老師、石附周行老師たち約二十名で、中外日報社の主催する、二十日間の「インド仏蹟巡拝の旅」に参加することになりました。その巡

拜団の一員として、伊藤先生が特別に入っておられたのです。

伊藤先生は世界的な建築家で、インドのデリーに、ハンセン病治療のためのセンターを設計され、そのセンターの竣工式に出席する目的でインドに向かうところでした。ふつう先生ほどの一流の芸術家であれば、ファーストクラスで一人静かに行けるものを、わざわざ若い修行僧たちに混ざって旅をしようと思ひ立つあたりが、まことに先生らしい気さくさであり、仏に対する謙虚さで、おかげで私は仏縁ともいふべきすばらしいご縁をいただくことになったのです。

知的で品のいいお顔にスマートな体、穏やかな口調……。イギリス紳士のような方だなあ、というのが私の第一印象でした。先生は、自ら世界的建築家であると名乗るような方ではありませんでした。何か、凡人とは違う斬新で鋭い感性をお持ちの方のようだと、一見するだけで

感じる事ができました。

私たち一団は、魂が清められるような多くのインド仏蹟を巡拝していきりましたが、先生は、片手にスケッチブックを持ち、いつ見ても何かをスケッチしていらっしやいました。とくに尼蓮禪河は、心ふるえるほどうまかったので、思ひ切って、

「先生は画家ですか」

とおたずねしたところ、

「いえ、建築家なんですが、絵も少々描いているのです」

と微笑んでおっしゃいました。これも伊藤先生の、決して奢ることのない謙虚さで、この頃は、何度も個展を開かれるほどの日本南画の大家の域に達しようとなさっていた方だったのです。それがわかるのもう少し後になるのですが。

私は先生に魅かれるものがあり、インドでは先生とともにさまざまなところを歩きました。





フツツカカ

1000

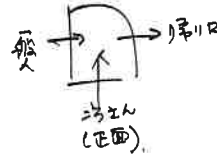
5~6世紀

ヒレノ人々の造り

1880年

英人が発見した仏像
は完全に後漢時代

フツツカカ(南)の同様の
像は存在



フツツカカ(カキ市内)

1000年 釈尊が坐した所
フツツカカ 1000年内 1000年

(南) = 1000年 釈尊 5代目の
FUTSU

仏教美術の究極ともいわれる洞窟・アジャンタ、エローラでは、専門家も舌を巻くほどの素晴らしい講義を個人的に受けることができました。また、骨董品の買物に出かけ、古美術に対する関心を引き出していただいたことは、私にとってこの上ない収穫となりました。二人で手に入れた世界一流のチベット曼陀羅をはじめ、私が古美術のコレクションをはじめめるきっかけをつくってくださったのも伊藤先生なのです。

インド仏蹟参拝旅行の帰り、石附師と私はタイのパクナムに一年の修行を致しました。その間も、又、タイから帰国後も伊藤先生との文通や交流は続き、昭和四十四年には、私の仲人をお引受いただきました。結婚にいたるまで、何度かのお見合いがありました。そのつど伊藤先生はついてきてくださり、まるで実の息子のことのように、横でハラハラしたり、安堵した

り……と一生懸命になってくださいました。

昭和五十九年には、善光寺開創十五周年を記念して、釈迦殿を建立いたしました。その設計を伊藤先生は快く引き受けくださいました。五十年先の仏教界はこうなっているだろうと伊藤先生が心に描く通りの設計をしていただきましたとお願いしたのです。

「ゼロから出発した私が寺を持ち、発展させることができましたのも、み仏の導きとみなさまのお力添えのおかげ。十五周年を一つの節目として、釈迦殿をつくり、また、報恩として、海外に留学僧を派遣して人材の育成をはかり、世界の平和にいささかなりとも貢献したいと思うのですが……」

そういうと、先生は大きくうなずかれ、以後一番の賛同者となり推進者となってくださいました。そのとき、先生におっしゃっていた言葉は、いまでも私の心の財産として刻まれ

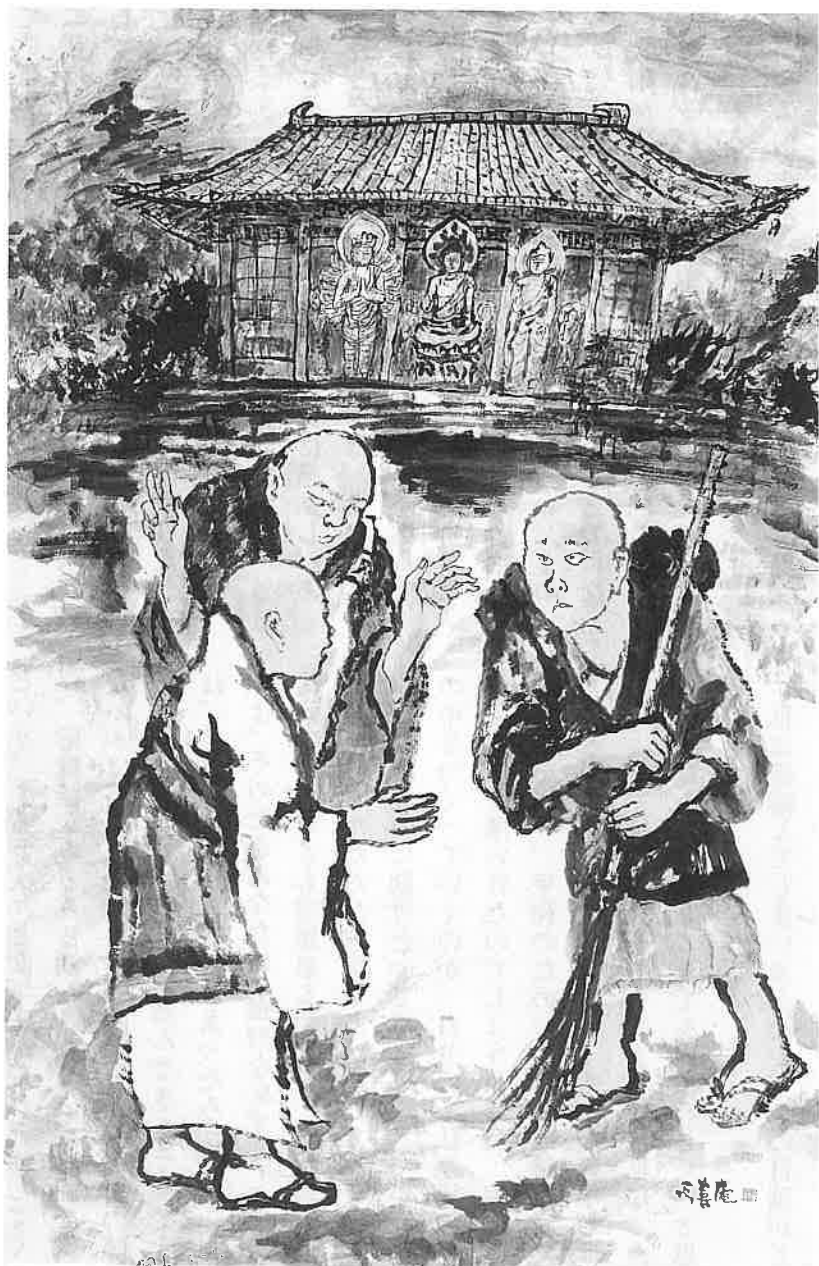
ています。

「私は、方丈さまの人生観・生き方に深く共感し、感銘を受けているんです。〃宗祖を通して釈尊に返れ〃という基本理念を修行時代から貫き通し、それを実行していくエネルギーには圧倒されます。

そもそも、私があなたの生き方に感動し、あなたと交流し続けたいと思ったのは、あの、若き日の全国托鉢行脚の話聞いたときからです。もとは電車の乗り間違いによって始まった托鉢行脚だったようですが、ポロポロの着物、すり切れた草履で何カ月も歩き続けるなど、いうのは簡単だが、誰でも実際でできることではない。雨が降り、雪が降り、金もなく、同じような若い子から冷たい眼で見られ、野宿を繰り返す…。ある雨の日、『般若心経』を唱えながら、女子校の前を歩いていたとき、ふと気づくと女学生がそばにいて、十円のご喜捨をくださった

という。すると次々と女学生が現れ喜捨してくれ、応量器がみるみる満たされて…。感謝で胸がいっぱいになったとき、雨が上がり、雲の隙間からサーッと陽が差し込んできたそうですね。どんなに美しい光景であつたらうと思いませんよ。そのときあなたは、強烈な恥ずかしさも、惨めさも、寒さも空腹感も超えた、〃無〃の境地になって、ただただ感謝した。そして、こんなふうにお互いに助け合つて幸せになっていく世の中をつくっていくのが、自分の・仏教徒の使命であると悟られたのでしようね。今、海外へ留学僧を送り、平和のために生きる人材を育てたいと思うあなたの気持ちは、あの、青年日の真つ白で純粹な気持ちそのままだ。私にできることなら、どんなことでも力になりたいと思う」

私は恐縮してしまいましたが、この言葉がどれだけありがたく思えたかわかりません。



伊藤三喜庵先生絶筆

伊藤先生は、私の生き方に共感したといつてくださいましたが、実は私の方が、先生の生き方・考え方、そして数々の作品にいつも教えられ、育てられ、磨かれてきたのです。

伊藤先生は、穏やかで謙虚な中にも、最初に私が直感したように、斬新で大胆、そして鋭い切り口で二十一世紀を見通す眼力を備えておいでになる方でした。

そしてそれらをおとばで語るのではなく、「絵画」という手法で表現してこられたように思うのです。「伊藤三喜庵^{さんきあん}」という雅号によつて…。

伊藤先生は建築家として世界的に有名なことはもちろんですが、一方、お若い頃から絵画制作に対する情熱は人並みではありませんでした。ずっと油彩で洋画を描いておられました。四十歳代の終わり頃から墨絵に転向。以後、洋画手法を生かした独特なタッチ・思想の水墨画を精力的に描き注目され、新しい南画の開拓・

推進のリーダーとなられました。大胆な画面構成と緩急自在の筆致、高い精神性のある躍動感あふれる作品から、また、見ているだけで心がほのぼのとしてくる作品…。先生の作品に、私は満ち満ちる生命エネルギーを感じずにはいられないのです。たとえば、「古代スリランカ考証」という絵には、お経を手にした一人の現代女性があるか彼方を見つめ、その背景に古代のさまざまな生活状況が描かれています。現代と古代を融合させるダイナミックな発想もさることながら、描かれた人々の生き生きとした表情、祈るような表情：時代を問わず、人は言葉にならない領域―魂や、瞑想、祈り、感動、詠嘆、生命を持つて生きているんだよということを改めて感じさせてくれます。また、「怒れる神々」という絵には、思わずふるえがくるほどの恐ろしい形相の神々が描かれています。これも、現代人の精神の放浪・荒廃を悲しみ、物欲、金銭

欲にとらわれて心をないがしろにしていきそうな風潮を見通し、怒り、二十一世紀に向かつて、「もつと心を大事にしなさいよ！」という伊藤先生のメッセージがこめられているように思うのです。『説法釈迦』や先生の描いた数多くの『観音さま』を前にすると、たとえ周りがどんなに騒がしかろうとも、作品と自分一人とが精神の交感―心の対話―ができ、まことに謙虚に心穏やかになれ、『生かされている自分』を感じる事ができる人も多いのではないのでしょうか。

時代の急激な流れに左右されず、普遍的な美・慈愛・心・祈りのこめられた伊藤先生の作品は、どんなにこれから時が変化しようとも、変わらず、未来に生きる人びとに、真の生き方を示唆してくれる、すばらしい遺産であると私は思います。

ありがたいことに、善光寺十五周年を記念して発行した季刊誌『成寿』もはや、二十七号を

迎えますが、発行当初から伊藤先生には、表紙の絵、本文中さし絵、題字をずっと描いていた、だき、全国の読者の方から絶賛をほくしました。この他、善光寺から出る出版物のポスター等すべて、伊藤先生にさし絵をお願いしているのです。お忙しい身だというのに、先生も『成寿』に描くことを、ご自分のライフワークとして楽しみにしてきたといってください、一度も休まずに続けてくださいました。いつか、これらの作品を集めて、伊藤三喜庵先生の『回顧展』を開くのが私の夢なのですが。

また、ライフワークといえば、読売新聞朝刊に毎日掲載された津本陽作の（ジョン万次郎の一生を描いた）『椿と花水木 万次郎の生涯』では、五百十一回連続でさし絵を描かれましたが、毎晩毎晩、作者の遅い原稿を待つて一瞬にしてテーマを読み取り描き仕上げるといふ日々はどれほどハードなものであったかと思われれます。

このとき先生は、七十歳代後半にさしかかっていたのですから、いったいあのスリムな体のどこに、それほどエネルギーがたくわえられるのかと驚嘆したものでありました。また二十歳以上年下の私が、「疲れた」などといっていている場合ではないと、教えられたりもしました。作家・津本陽氏は、伊藤先生のさし絵を、

「伊藤先生の墨絵には、お人柄があらわれるというのか、見る者は創造力を刺激され、画中の情景の中に包み込まれるような思いに誘われる。おだやかなうちに凜平とした風韻がにじみでている」

と評されています。まことにその通りで、とくに私など、無人島で喉が乾ききった万次郎が岩山の頂上にやつと古井戸をみつつけ、仏が恵んでくれた水だと思ひ手を合わせたという部分のさし絵として描かれた観音様の絵に、伊藤先生そのもののようなやさしさを感じます。そこに

は「なんまいだ、なんまいだ」と、温かい書き文字が記されているのです。

また、週間サンケイに連載された小池一夫作『乾いて候』では、みごとな時代考証のもとに、粹で洒脱な江戸の人びとや風景を描き続け、多くの絵画ファンを魅了しました。あのような表現方法は日本屈指……まさに天才的だと私は思います。先生の描く女性のみなふくよかで美しく、どれも私には、先生のお好きだった観音像に見えてまいります。小池一夫氏というのは、『子連れ狼』の原作者としても有名ですが、その小池氏は、

「伊藤三喜庵先生は、自分が大ファンだった柴田錬三郎先生に面差しが似ている」

とおっしゃっています。本当に、お年をめせばめすほど若々しく、ダンディな先生でありました。

こんなふうにマスコミの仕事も忙しい中で、

先生が時間をつくってくださり、ともにスリランカ旅行に行ったのはつい五年前の平成四年の秋のこと。お亡くなりになる四年前とは思えぬ、エネルギーシユな活動ぶりでした。

スリランカには、それまでに二名の留学僧を送っていたこともあって、よりスリランカとの親善友好を深める道を模索しようという訪問目的でした。空港に伊藤先生は奥さまといっしょに現れ、少し照れたように、

「家を離れるのは少しさみしい気がするねえといったら、家内が空港まで送ってきてくれたんですよ」

とおっしゃいました。本当にはたからみてもうらやましくなるほど、仲のよい、すばらしいご夫婦でいらっしゃいました。また、連載中のお仕事で忙しかったのでは？ とおたずねすると、

「十六、七枚描いておきましたよ。力を入れて

描いてきたから大丈夫ですよ」

とニコリと。日本人の男子の平均寿命をクリアした方とは思えぬ発言に驚かされたものです。スリランカでは遺跡を巡拝し、伊藤先生はその歴史的美術的価値に興味津々で、相変わらぬ精力的にスケッチをしておられました。また、知事、大臣、大統領も訪問しましたが、とくにエネルギー省大臣と、建築家でもある伊藤先生とは話がはずみ、スリランカの国策遂行上の問題点などについて意見交換をさかんになさっていました。また、スリランカ仏教界の大御所である大菩提会会長ヒテイガレー・パナティッサ大僧正が誕生パーティーに招いてくださったとき、客の中にパキスタン大使がおられました、伊藤先生を見るなり、

「お顔を存じ上げています。伊藤先生はかつてパキスタンの病院を設計され、長く滞在され大統領とも親しく、大統領室にお写真が飾られて



橫濱善寺
南無阿彌陀佛



三喜庵
印

ありますから」

とかけよつてきましたが、伊藤先生はこのときも謙虚な態度で、ていねいなご挨拶をされていました。『実るほど 頭こぶを垂れる 稲穂かな』——まさに世界のどこへ行つても、伊藤先生はそのような方でした。

一方たいへんおもしろく楽しい一面もあり、昼は巨象が水を浴びている池のほとりのレストランで、夕食をとったときは、鮮やかに思い出されます。すばらしいスリランカ音楽を奏でる楽士が楽器をかきならし、歌いながら各テールをまわつてきましたが、伊藤先生はそれはお喜びになって、夢中でナプキン・ペーパーにその姿をスケッチしておられました。お酒も少し召し上がり、朗々とした美声で歌もうたわれ、健康的な頬の色、明るい笑顔……。お腹が痛くなるほど二人で笑いあったのに。まさか、あれが、伊藤先生との最後の大きな旅行になる

なんて、そのとき誰が想像できたことでしょう。

平成八年三月三日、夕刻。伊藤三喜庵こと伊藤喜三郎先生は八十二年の生涯を閉じられました。研ぎ澄まされた感性のアンテナで、仏からのメッセージをキャッチし、現代に生きる私たちに『絵画』という表現方法で伝え続けてくれた偉大な画家。そして、わが子のように私を想い、生きるに値する人生スタイルをその生き方によつて教え続け、私を育ててくれた、人生の父。

「絵というのは、八十歳からだよ」

そういつて、最後まで学ぶ心や情熱を失わなかった伊藤先生……お姿は見えなくなつても、先生の精神は私の心の中に生き続けています。

■追悼■

沙門三喜庵

横浜善光寺留学僧育英会理事 東 隆 眞

私が、伊藤喜三郎先生こと伊藤三喜庵さんのお名前を存じ上げることになったのは、善光寺さんへおうかがいするようになったこの十数年来のことである。

この世は、出会い、交わり、別れであると思うが、佳士から佳士をお引きあわせいただいたことである。

周知のとおり、伊藤先生は、伊藤喜三郎建築事務所会長や東京都建築事務所協会名誉会長や東北工業大学教授をおつとめになった現代日本

を代表する建築設計家のお一人であると同時に、日本自由画壇理事長として墨絵をものする画家として著名なお方である。

私は善光寺の黒田老師から善光寺さんにかがった折、伊藤先生ご夫妻をご紹介いただいた。また、画集『三喜庵墨絵』（求龍堂刊）や仏画をいただいた。

先生は、お若いころは洋画を学んでおられたようであるが、のちに感ずるところあり、墨絵に没頭されるようになった。富岡鉄斎の高弟河



駒沢学園照心館で伊藤先生ご夫妻と、黒田老師、東学長

口楽土に師事されたから鉄斎の孫弟子ということになる。先生の作品は全国各地におさめられているらしい。

平成六年九月、鶴岡市、保春寺の畏友大八木春邦老師の御師父の葬儀に赴き、出羽三山神社に登り、阿部宮司さんのねんごろなおもてなしをうけ、美術館で先生の大作に出会ったときは、ほんとうにおどろいた。そして、うれしくなっていました。

平成七年の春、私が学長、校長をつとめる駒沢学園の照心館修道室の床の間に、ご無理をお願いして、先生の仏画墨絵二点を掲げることになった。黒田老師のご案内で五反田の伊藤邸に参上して作品を見せていただいた。そして、先生ご夫妻、黒田老師にご来校願ひ、こまかいご指示をうけた。仏画は、照心館修道室のふんいきにぴたりとおさまった。一層の明るさとやわらぎがひろがった。学園の宝物である。

もとより私は門外漢であるが、そんな素人の私にも、先生の仏画ないし人物画は見ていたのしい。耳を澄ませば仏、菩薩の説法の声が聞こえてくるようである。男や女の表情から笑い声や叫び、つぶやきや怒りも伝わってくるようである。

平成六年十一月の下旬、銀座の和光で個展が開かれた。黒田老師や佐藤俊明老師、亡くなった馬場道男老師、形山俊彦さんや山口義男さんと出かけた。このとき先生のおすがたは会場になかった。病氣療養中とのことであった。

先生は、作品によく「沙門 三喜庵」と署名された。沙門とはサンスクリット語のシャマナの音写で、努力するという意味があるとされ、一般に男性の出家修行僧を指す。三喜庵は喜三郎に由来するのであろう。先生は信仰心も篤く、善光寺さんの檀家総代さんをおつとめになっていた。「沙門」と号される意味を直接うかがおう

と思っていたが、その機会を失った。しかし、なぜか、この点が今も記憶に残っていて、この小文に「沙門 三喜庵」と題して、先生をお偲びするのは、そのゆえである。

(駒沢女子大学学長、文博)



■ 追悼 ■

徳
ぶ

防衛医科大学校
第一内科・教授

中 村 治 雄

伊藤喜三郎先生は、数多くのユニークさを持った方であった。

特にその考え方には、学ぶべき点が多かった。年齢の割には、と申し上げると大変失礼であるが、考え方は新鮮であり、スマートであった。

物を考える時に、私達は得てして、その事実の起る理由、是正の方策など、主としてその事実の周辺のことしか考えないが、伊藤先生は、必らず歴史的、社会的背景を含めて考えられ、その考えた事の波及効果をも推定されていた。

つまりきわめて広い視野に立って物事を考えられていたわけである。

「中村ドクター、お塔婆の木材は韓国の山から伐り出しているのです、禿山になってしまっていると聞いていますが、どう思いますか。」

とある総代会の日に、私の意見を求められた。何んとなく習慣であり、仏様に対する供養として捧げられていたお塔婆の出所について初めて耳にする話でもあり、隣国の山にそれだけ被害が及んでいるとは、夢にも思わなかった。

この質問に対しては、やっと、

「木で作ったお塔婆でなく、他のものにしてはどうでしょうか。」

と答え、さて、何かよい材料はないものかと考え込んでしまった。

一定の時間が経てば、くちはてる性質のものとして、



「泥で作ったらどうでしょう。」

「それはユニークかも知れない。字を書いたり、立てることができれば好都合だ。」

この点に関する伊藤先生との会話は、それ以来、なくなってしまった。

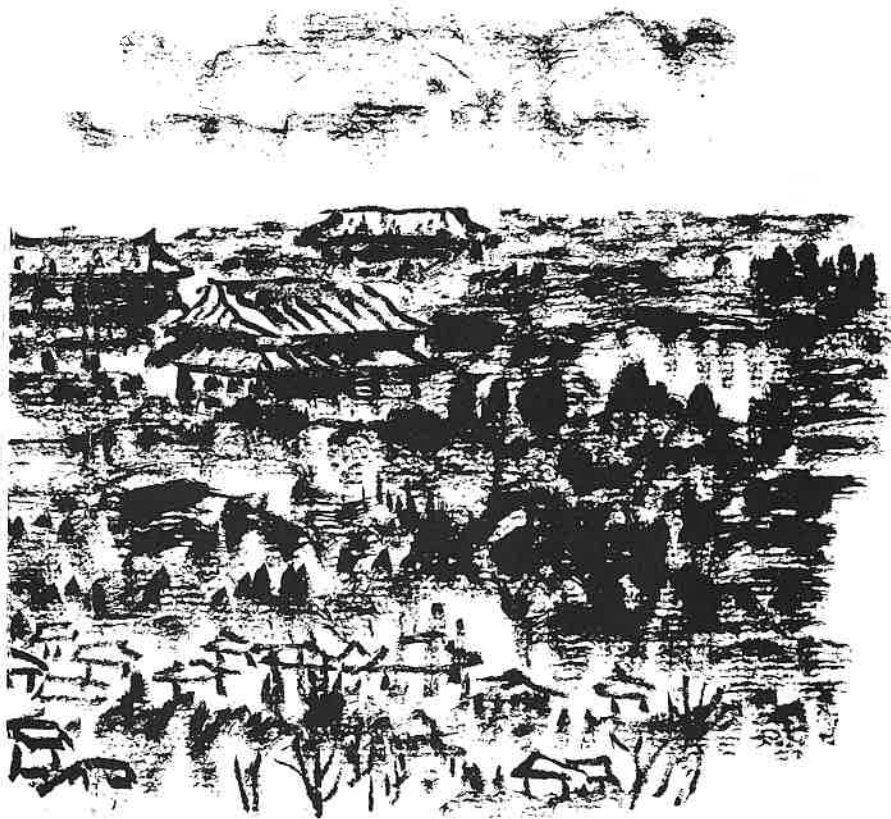
エコロジ―の立場から、いずれ真剣に考えなければいけない時期がくることは、兩人ともよく解っていた。

泥で作ったお塔婆が実際に利用できれば、善光寺の一つの特徴にもなろうし、木材資源の節約という面からも得策であろう。

これからの善光寺の発展を願って、おそらくエコロジ―の面からの特徴を加えることを、ひそかに伊藤先生は見守っておられるに違いない。

ここに謹んで御冥福をお祈りします。

(善光寺総代)







絵 本

『ジョン万次郎の生涯』より

津本陽「椿と花水木 万次郎の生涯」あらすじ

伊藤三喜庵

(求龍堂刊)

花水木の花がさわやかな六月のフェアヘブン





一八二七年、万次郎は土佐中ノ浜の漁師の家に生まれた。幼くして父を亡くし、家族の中で唯一人の働き手として、九歳から村年寄の家に下働きに出ていた。十四歳の時、偶然のことから、叔父の口ききで、宇佐浦の船頭筆之丞の鯉舟に乗り組むことになる。しかし、漁に出た船は嵐にあい、黒潮に流されやつと無人島に漂着した。万次郎たちは、五ヵ月にわたる無人島の命からがらの生活の後、たまたま通りかかった一隻の異国船に助けられる。この時から、彼の運命は大きく変わるのだった。万次郎以下五人を救った船は、世界の海に出漁するアメリカの大型捕鯨船ジョン・ハウランド号であった。キャプテンのホイットフィールドにみこまれた万次郎は、筆之丞たちとホノルルで別れ、アメリカの文化と捕鯨法を学ぶため、この船の乗組員になることを決意する。荒波を生きぬいてきた男たちは、彼に好意を示し英語、手鋸打ちを

町では人種差別も



教えこんだ。いつしか彼は船の名をとって、ジョン・マンと呼ばれるようになっていた。

船は長い航海を終えアメリカ本土ニューベツドフォードに帰航した。アメリカに住むことを決めた彼は、フェアヘブンにあるキャプテン夫妻の農場へ養子として迎えられた。時には人種差別に心を痛める事もあったが、多くの人々は彼に親切であった。アメリカ人の友人も出来、共に難関の試験を突破し、航海士の学校へも入学した。万次郎は何かにつけこの国の自由と平等の精神に驚嘆した。また、キャサリンという女の子と出合い初めて恋をするのだった。

万次郎は優秀な成績で学校を卒業し、さらに自分を高めるため樽造りの苦しい修行も終えた。そんなある日、元ハウランド号の乗組員テイビスがフランクリン号という捕鯨船のキャプテンになったので一緒に船に乗らないかと彼を誘う。航海に出れば三年は戻れぬと思った万次

カリフォルニアの金鉱に向かう



郎は愛するキャサリンの希望を入れ、正式に結婚した。そして再び海へ。この航海はとて厳しく、船長デイビスは気がふれ仕事も出来ず、人並みはずれた勇気と技術をかわれた万次郎は急遽副船長一等航海士に選出された。名譽と収穫を手にキャサリンとの再会を待ちきれぬ思いで帰航した彼に信じられぬ様な悲報が待っていた。キャサリンが海で行方不明になったというのだ。最愛の妻を失った万次郎は、悲しみにうちひしがれ、日本への帰国を決意した。そして、その資金を稼ぐためゴールドラッシュでにぎわうカリフォルニアの金鉱に向かった。荒くれ者たちの間で金を掘り、資金をためたのち、アメリカの商船でホノルルへと向かう。それは、土佐の仲間たちと一緒に日本へ連れて帰るためであった。

ホノルルで別れた五名のうち、病死したものと永住を希望した二名を残し、万次郎以下三名

黒船の情報は日本をゆすぶった



での帰国となった。日本上陸用のボートを買いいよいよ上海行きの商船に乗りこんだ。土佐を出てまさに十年目、万次郎たちは琉球への上陸に成功したのだった。

異国の装束をした彼らは、沖縄、薩摩、土佐で何回もの調べを受けた。しかし、ついに、生まれ故郷中ノ浜に帰ってきたのだった。母子が抱き合う様子を見て村人たちは貰い泣きをした。そこではまた万次郎は自分自身の墓に對面し、言葉を失うのであった。

一八五三年、ペリー率いる四隻の黒船が、浦賀にやって来た。幕府は江川担庵(太郎左衛門)の献言により、アメリカに詳しい万次郎を土佐藩から召し出した。彼のアメリカでの見聞と知識は幕府への貴重な助言となった。幕府は万次郎を幕臣とし担庵の屋敷に住ませた。

一八六〇年幕府は条約批准のため遣米使節を送ることになり、その随行艦咸臨丸の通訳とし

江川担庵にすすめられ万次郎結婚

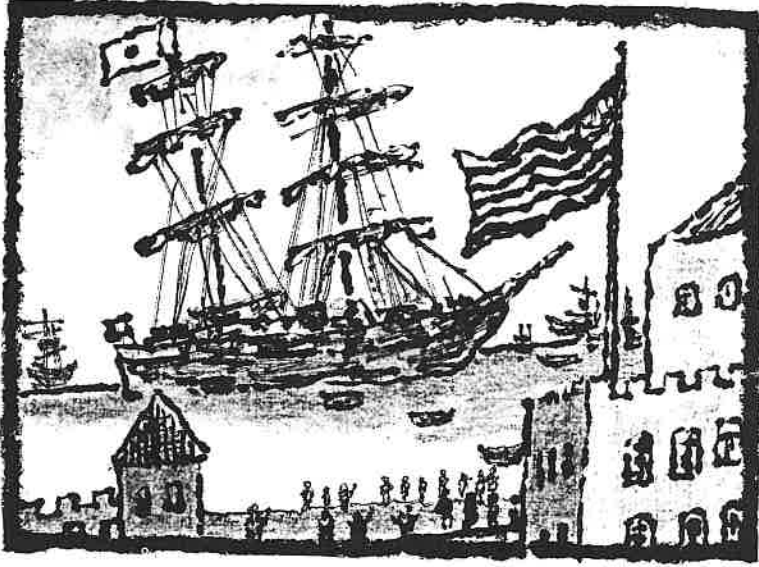


て万次郎を加えた。木村撰津守が提督、勝麟太郎（海舟）が艦長であった。またブルック大尉以下十数名のアメリカ海軍も同乗した。出航してまもなく荒天にみまわれたが、万次郎は通訳としてだけではなく、ブルック大尉とともに航海のことに力を尽した。アメリカで咸臨丸の日本人たちは大変なもてなしを受け無事帰国した。

帰国後万次郎は、日本で初めてアメリカ式捕鯨を行なったり、薩摩藩に召かれ航海術を教えたりして、アメリカで得た知識を大いに活かした。

年月は流れ幕府が倒れ、年号が明治、江戸が東京と変わり、西欧文化の導入がなされる様になっていった。四三歳になっていた万次郎は政府の使節としてヨーロッパへ向かう途中、なつかしいアメリカのフェアロップへ立ち寄った。キヤサリンの家が見える。キャプテンの家も。そ

咸臨丸、サンフランシスコ湾に入港



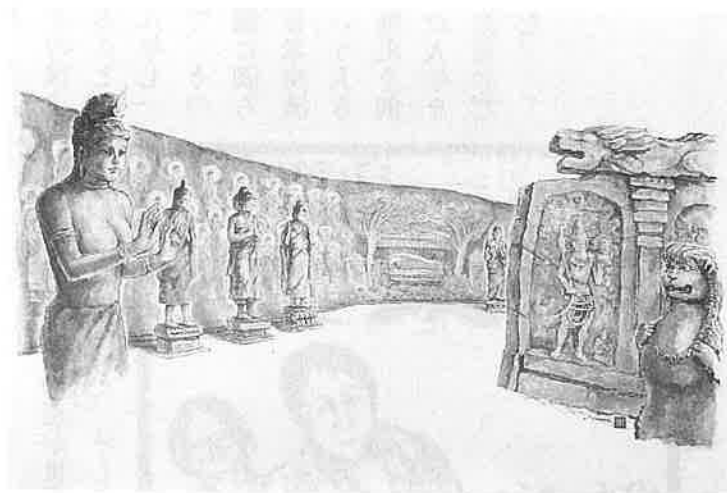
してあのキャプテン夫妻と感激の再会を果たすのだった。

その後中浜万次郎は東京に戻ったが世間と交わることなく閑居をつづけていた。そして一八九八年七歳で、その波瀾に満ちた日米交流という大きな歴史を創った人生を閉じるのだった。



伊藤喜三郎（三喜庵）略歴

1914年東京に生まる。1930年独立展などに出品を始める。1938年日本大学工学部建築学科卒業。1948年より数年、日本大学工学部講師。1952年伊藤喜三郎建築研究所設立。1961年洋画より墨絵に転向。1963年より数年、東北工業大学客員教授。1964年三越本店にて個展。以後個展多数。1971年日本南画院にて文部大臣賞受賞。1983年より文藝春秋、講談社などの挿絵を始め、1991年より2年間、読売新聞連載小説、津本陽『椿と花水木』の挿絵を描く。水墨画関連の著作として数冊、中に『三喜庵墨絵』（求竜堂）、『三喜庵墨絵画集』などがある。現在伊藤喜三郎建築事務所会長、東京都建築事務所協会名誉会長、日本自由画壇理事長。



伊藤三喜庵の世界



北京秋色(部分) 1981年(128cm×143cm)





菩薩行 1979年(173cm×237cm)



靈鷲山 1980年(123cm×158cm)



来迎图 1981年(38cm×56cm)



人形お染 1980年(81cm×54cm)

深き感謝をこめ

善光寺落慶の日 捧ぐ

昭和五十七年十月四日

三喜庵 伊藤喜三

出山親迎之図

沙海三喜庵



インド石窟の旅

インド・スリランカ・パキスタンを旅行しており、インドの仏教美術の黄金時代を象徴するアジャンタとエローラの洞窟を見に行く機会がありました。

マドラスからボンベイ経由で、両洞窟を見る拠点となるオランガバードに飛ぶ予定でしたが、ボンベイに着いて見るとオランガバード行きはキャンセルになり、その日はフライトが無かったことでした。同じ方面に行くほかのインド人旅客と一緒にタクシーと交渉しましたが、

ニューヨーク州立大学

伊藤 宣博
藤 宣博

空港にいるタクシーはどれも古い車でとても長距離、特に夜の旅には耐えられそうにありません。それでは汽車で行こうということになり、タクシーに乗ってボンベイ駅に行きました。何しろものすごい人混みでどここの窓口も長い行列です。やっと女の人専用窓口があることが分かり、幸いそこは列が短かったのです。しかし並びました。しかし残念ながら席は全部売り切れで今晩は乗れません。インドの人口の多さに今更ながら感心して次の策を考えました。残る手段

は長距離バスだけなのでそれに乗ることになりましたが、バス乗り場がどこなのかさっぱり情報がありません。幸い空港で一緒だったインド人が情報を集めてくれて、またタクシーに乗ってボンベイの町を一時間程走りました。予定になかったボンベイの町の観光もタクシーの中からとはいえ、する機会を得たわけです。やっとバス乗り場に着き、幸いエアコンのバスに席が三つ残っており、一時間後に出るというので待つことになりました。夜九時発、十一時間後にオランダボードに着きます。真夏の旅でしたので日中は四十度を越える日も少なくなく、夜になってもニューヨークの北国に住んでいる我々にはかなり蒸し暑い一時間でした。沢山バスが到着するのですがどれも満員で、我々のバスではなく、かなりのオンボロバスが多いので覚悟しておりました。やっと九時過ぎに我々のバスが着き、やはりほとんど満員なのですが、三席

空いており乗り込みました。外の空気に比べて非常に涼しくこれならば楽に十一時間過ごせるだろうとほっとしました。それでも中はごった返して我々も足の下に荷物を置きその上に足を置いて身動きできないような状態で出発しました。クーラーのきき過ぎと身動きできないこととあまり良く眠れない夜でしたが、それでも十一時間後には無事にオランダボードに着きました。幸い予約のあったホテルの五十メートル先でバスが止まったので早速ホテルにチェックインし、朝早かったので地元の旅行社と交渉してエローラとアジャンタの洞窟へ行く車を手配してもらい、その日はホテルでゆっくり休むことにしました。

アジャンタの石窟

アジャンタはオランダボードから一〇〇キロ以上もあるので朝早く手配してもらった車で出

掛けました。アジャンタの洞窟は紀元前二世紀から造られ始め七世紀頃には最後の洞窟が掘られたようです。アジャンタで洞窟が掘られ始めた頃はモリヤス帝国のアショカ王が仏教を国教と定めてから百年以上もたっており、仏教は初めの勢いを無くし始めてブラーミニズムが勢力を伸ばしている頃でした。それでもインドの北西部では仏教を保護する貴族たちがまだ沢山おり、その人達が資金を出して始められました。

アジャンタ洞窟寺院建造は紀元前二世紀から紀元後二世紀までの第一期と五世紀から七世紀頃の最盛期となった第二期に分けられますが、第二期はグプタス帝国が栄えた時期で王族達はヒンズー教でしたが仏教にも厚い保護を与え、アジャンタで新しいすばらしい洞窟が掘られて行きました。その後どういわけかここアジャンタは忘れられ、エローラの方へ洞窟掘りのエネルギーが移動して行きました。アジャンタの

アジャンタ石窟 外観



洞窟は長い間忘れられておりましたが、一八一九年にイギリス軍の将校達が猪狩りに出掛けた時にたまたま見つけ、かなり荒れていましたが、それでも二千年もたっている壁画の見事さは正に印象深いものだったようです。ここは人里から離れていたために保存に役立ったのでしよう。

紀元前二世紀から十世紀頃までアジャンタやエローラに見られるような岩を掘り除けて建物を造る建築がインドで見られました。このやり方は一度掘ったらもう取り替えることができないので絶対に間違いができない方法です。

まず最初に岩の表面に下書きが書かれます。それから掘る人達が入り上から下へと、天井が初めに完成するように掘っていきます。そしてその後絵書き、彫刻家、仕上げ人等が入り、部分部分を石が取り除けられる度に完成して行きます。床は上から溝を掘り始め、それから横に

アジャンタ石窟 菩提樹葉モチーフの窓



柱となる場所をさけて掘り進んでいきます。これらの工事が全て電気工具は勿論のこと大きな工具なしに手道具で行なわれたわけですから当時の人々の忍耐力、信念、信仰心に感嘆します。

この洞窟は全部で二九ありますが、ものすごい峡谷にあり、昔は各洞窟から階段でワゴレ河に降りられ、そこから生活に必要な水運び上げていたようです。今はその階段は全て無くなっていますが、洞窟の前には観光客のために立派なコンクリートの歩道が造られています。

このアジャンタ洞窟のまず初めの驚きはこれが完全に人里から離れた深い峡谷の中にあり、人間の苦しみを考え、どうすれば救われるかをめい想するには理想的な場所であることです。ここに住んだ僧達は水をこの河から運び上げ、日用品は近くの村から手に入れました。知的な刺激はこのアジャンタが中国とかアラビア海からの貿易ルートに近かったために商人や旅行者

達が立ち寄り、僧達の知恵を借りると同時に、外からの情報を残して行ったようです。この場所はめい想のためには十分人里から離れておりますが、そうかといって世間から孤立しているわけではありませんでした。

洞窟は河の流れに沿って馬蹄型に並んでいて両端が新しいものでまん中に古いものがあります。二九の洞窟の内、いわゆる礼拝をした寺院は五つで残りは僧達が生活をした僧院です。

礼拝堂は大きい長方形の部屋で何本もの柱で本堂と三方の廊下が区切られております。そして入り口の反対側の一番奥には聖所があります。聖所には半円形の通路に囲まれて祈願のための像があります。入り口は菩提樹の葉のモチーフでできた大きな窓のある独特の正面となっています。この窓は年代が進むに連れて大きく、しかも手のこんだ物になっていきます。

アジャンタの工芸師達はここの全ての洞窟に

木造の建物の感じを出そうと努めたようです。

高いアーチ型の天井は木の梁があるように見せかけてあります。実際、かなり頻繁に本物の木の梁が石の天井の中に取り付けてあります。同様に柱や窓のデザイン、入り口も木や竹で造られてるように見せかけられています。

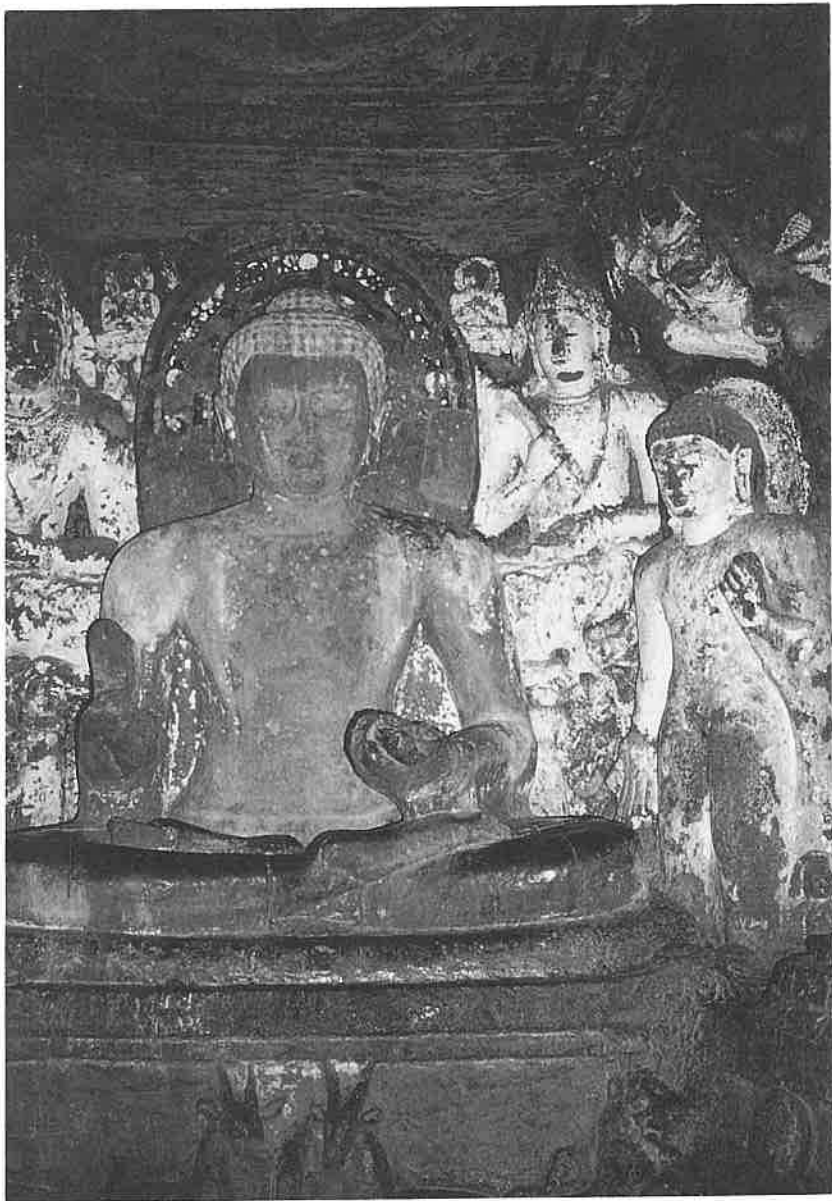
僧院の方の造りは、やはり長方形の部屋でその両側に小さな個室がいくつもついています。入り口の反対側の奥には仏像又はストゥーパがあります。僧達はここに住み、生活し、それぞれの個室で睡眠を取ったようです。個室にはベッドとして使われたらしい石の台があり、中心の部屋とは木戸で仕切られています。

ここは壁画が非常に有名ですが、再発見された後イギリスによって補修されましたが、それがかえって悪くかなり痛めてしまいました。その後一九二〇年に二人のイタリーの専門家が修復にあたり、それ以来良い状態で保存されてい

ます。

馬蹄型の中心部にある古い洞窟は仏教が小乗と大乘に分かれる前の小乗時代のもので、実際の人間像を表わしたり偉大な教師自身を描くことは禁じられておりましたので、そのかわりに幾何学的な模様とかストゥーパが用いられております。その頃の洞窟と思われる第十番の洞窟の入り口には仏像彫刻がありますが、これは大乘仏教が出て来た頃に追加された物であろうといわれています。

壁画を書くためには下地作りに細かい注意と時間のかかる準備がされています。まず、土、砂、野菜の繊維、わら、草が混ぜられて壁に塗られます。次に土と岩の粉が塗りこまれ乾かします。固める物は多分糊であったろうと考えられています。最後に薄く石灰が塗られて下地はできあがりです。その上に輪郭が辰砂の赤で書かれ下絵が塗られます。そして最後に仕上げ



アジャンタ石窟 彫刻と壁画

の色が塗られ、そのあと磨きがかけられています。初めの頃の壁画にはあまり色の良く保存されてない物もありますが、これが二千年以上もたっていることを考えるとその鮮やかな色彩には驚かされます。

アジャンタの壁画は勿論仏教をテーマにした物ですが仏様が王子の頃の宮殿の様子とか、沢山の王子や王女達の雅やかな生活、市場の様子、音楽家、毛皮の帽子をつけた外国からの高官、其の他戦争用の馬や猿、孔雀、象等沢山の動物も出て来ます。この洞窟が造られた千年の間の生活様式を垣間見ることが出来るわけです。

ここが一番栄えた時期には何百人もの僧が住み、祈り、生と死について考える生活をしていました。

エローラの石窟

エローラはオランガバードから三〇キロのと

ころにあり、洞窟は南北に二キロ続いて三四窟あります。ここが栄えたのは七世紀から十一世紀頃までです。ここはアジャンタと異なり、仏教窟、ヒンズー窟それにジェーン宗教の洞窟と三種類が並んでいます。ジェーンはヒンズーから生まれた宗教ですが、仏教とも似たところがあり、ヒンズー教の基となっているカースト制度を否定する宗教です。仏教窟が一番古く、そのうちにヒンズー窟ができ、それからジェーン窟が造られました。十二の仏教窟、十七のヒンズー窟、そして五つのジェーン窟があります。アジャンタは壁画で有名ですが、ここは彫刻で有名です。

ここはアジャンタが急な溪谷の傾斜地にあつたのに対し、なだらかな丘に造られています。仏教時代のものには仏教かインドでは下火になってきた頃のもので、割合に質素な感じのものが多いの比べ、六世紀から九世紀に彫られたヒ

ンズー教の洞窟は非常に手がこんでいます。仏教時代の業績を建築様式、彫刻ともにより手のこんだ複雑なものを造って追い越そうとしたようにかんじられます。

特にヒンズー教のカイラサ寺院は有名です。

奥行き五〇メートル余り、間口三三メートル、高さ三〇メートルもある大きなもので、二十万トン以上の岩がこの寺院を造るのに掘り出されたと推定されています。ものすごい見事な彫刻が建物全体に施されています。

この巨大な寺院も上から下へと掘り下げられていったので、足場を組む必要がありませんでした。この工法は絶対にやり直しがきかないかわりに、途方もない巨大な足場を組む必要がない利点もあったわけです。

カイラサはシバのヒマラヤの故郷を表わし、この巨大な寺院はヒマラヤの山々を象徴しているそうです。

一つの岩からくり貫かれたとは信じられないような複雑な建物です。ギリシャのパンテオンの二倍の広さ、一倍半の高さがあり、これを一つの岩から手道具だけで仕上げたとは本当に驚嘆します。多分世界で一番大きな一つの岩から掘り起こされた建造物であろうと言われています。七千人の労働者がシフトを組んで絶えず働いて百五十年かかったと信じられています。

ジェーンの洞窟はエローラの最後の段階、十世紀前後に造られました。五つあるジェーン窟の中で一番大きな寺院はヒンズーのカイラサ寺院に似ており、寺院の中にはこの宗教を興したマハヴィラの坐像があります。

ジェーンという宗教は仏教と同じ頃にインドでヒンズー教に反対して始まった宗教です。創始者マハヴィラはビハラの王子で、紀元前六世紀にヒンズー教のブラーマン「僧侶」制度を改革しようとして興した宗教です。カースト制度

を否定して僧侶階層が精神的に優れているという主張に反対して起こりました。仏教もジェーンも運命、輪廻、再生から逃れることが望ましいこと等のヒンズー教の基本的教えを受け入れていますが、僧侶階層による絶対的の一元論を否定しています。

仏教は救われるための手段としての極端な禁欲主義を否定しますが、ジェーンは極度の自己禁欲を勧めます。マハヴィラの教えによると嚴格に心と欲をコントロールすることによって救われると説いています。

ジェーン信仰者は現在三百二十万人、主にインドの南部と西南部にいます。彼等は生まれ変わることに従ってジェーンの聖人達の歩んだ道に従うことによって精神的な救済が得られると信じています。救われるためにはあらゆる殺生をしないことを信じております。このためにジェーンの人達は菜食主義ですし、職業も限られ

ます。例えば銀行とか、商業、及び専門職です。ジェーンの犯罪人はいらないとも言われますし、社会的には非常に尊敬されておりますが、皮肉にも厳しい禁欲主義を唱えるジェーンがけて経済的に裕福になる職業につくこと、特に金貸し等のために人気がない地域もあります。

二つのインド

一説によるとジェーン教も仏教もヒンズー教から分れた宗教とも言われています。国民の大多数がヒンズー教徒でその他に頭にターバンを巻いたシーク教徒、回教徒やクリスチャンも少数おりますが仏教徒はほとんどおらず、インド社会に於るアジャンタ、エローラに代表される仏教のおもかげはグライ・ラマに率いられるチベット仏教に置きかえられました。事実、アジャンタ、エローラの石窟はもはや宗教的価値というよりも文化遺産としての観光資源で名が知



エローラ石窟 カイラサ寺院

られております。

この様な文化遺産を持つインドは二つの顔を持っています。簡単に言って、都会と農村の大きな較差です。

二十五年前に初めてデリー、タジマハールそれに北西部のプンジャブ州を旅した時は雑踏と貧困のすごさにカルチャーショックを受けました。しかし、今回は、心の準備もあったのであまり驚きませんでした。それよりも、様々な変化が目につきました。

一九九一年に始まったインドの経済の自由化は、経済発展途上国の一員として年五%以上記録してきました。国内資本の民有化、外国資本の導入、それに貿易の自由化は高度成長をもたらし、貧困を減らし雇用率を高め、輸出の拡大にもつながりました。同時にインフレも抑制したので、インドの近代化と産業化を躍進させました。インド南部の都市バンガローは、インド

のシルコンバレーとも言われるほど、ハイテクの最先端の象徴として発展してきました。都会の若者達は西洋のファッションや娯樂を取り入れ、都市の豊かな層は電気製品、カメラ、スクーター等を購入しております。少数ですが、自家用車を手に入れる人達も出てきています。しかし、低所得者の間では腕時計やトランジスタラジオがせいぜいです。

インドの人口の七〇%以上は、農村に住んでおり、都市との較差は大きく、インドの二つの顔をあらわしております。

農村では、所得も低く、識字率が低く交通・通信網等のインフラが、まだまだ整っておりません。例えば、電気が来ていても自宅に引けない村民も多いです。『緑の革命』と言われた農業改革・生産向上もごく限られた地域にとどまり、日常の物質文明の恩恵に預っておりません。更に人口過剰のため、機械の導入は問題を生む事

があります。家事使用人を使うので、洗濯機や掃除機は、あまり普及しておらず、お手伝いさんを使う家庭では主婦の時間節約は問題になりません。逆に、家事使用人の職を奪う事にもなるので、生活の機械化は、社会的な抵抗もあります。

インド人は高度の長い歴史を持つ自国文化に誇りを持ち、ヒンズー教を中心とした信仰心も強い反面、閉鎖的で、後進的な面もあります。

日本や他のアジア諸国に比べると、イギリスの植民地下にあったにもかかわらず、西洋文化に強く抵抗している面も多くあります。インドの社会は、宗教、人種、そして特にカースト制により細分化され複雑な問題を抱えています。





日本語化したインドのことは

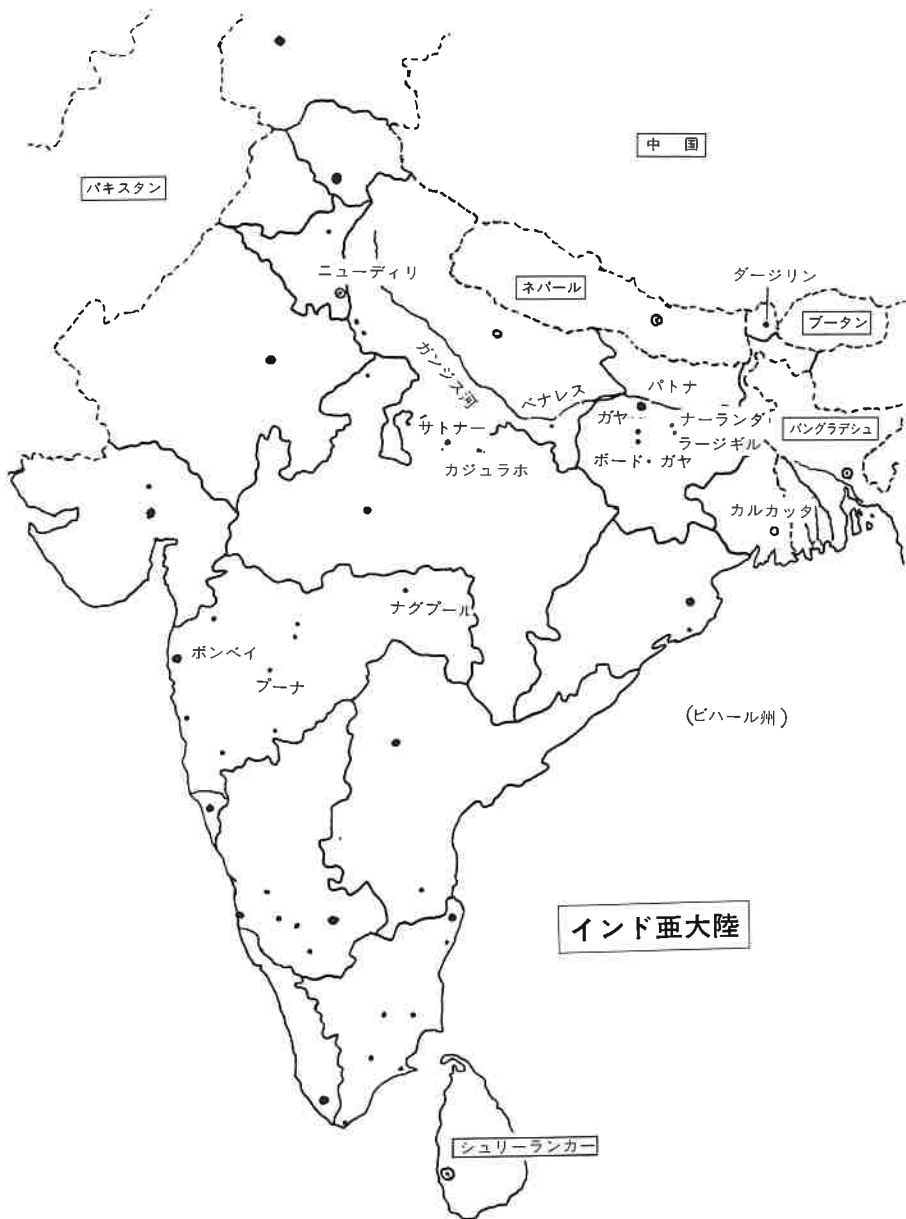
町田靖治

客年二月。インド亜大陸のヴィクラム暦ではキサーラヤといわれる「青々とした」とか「新緑の」という意味の月のことである。このことは日本語では如月（キタラヤ）という音が当ててあり、現地では春（パラツア）の入口に当たる。

ニュー・デイリで、ナタラージャ（舞踏王）と呼ばれる怒れるシヴァ神が踊り出している真鍮像を買う交渉を終えて、同行者といっしょに

アサフ・アリ道路沿いのレストランに入った。

ここでの夕食は各種のカレー料理。黄色いハルデイ（うこん）の具（カリ）はガラム・マサラ（辛い香料）の香味と唐辛子でピリッと味つけてある。これには鶏の股肉が別の皿に盛ってあったが、BC六世紀ころに仏教やジャイナ教が興り不殺生（ヒンミ）を説いて以来、ヒンドゥー教徒でも上位のカーストの人達の食事は菜食になり、肉を食



べない。インド人がナンという平焼きパンにつけたり、米食に混ぜ合わせたりして食するタルカリと呼ばれるこの香ばしい惣菜は、英国人が後にカリという名称で世界に普及したものだ。

この店を出るときに小さな店名のはいつた銅板がビルの壁にはめ込まれているのが目に入った。それが「チョール・バーザール」。私はびっくりして、同行のガイドにいった。「おいおい、なんで店の名前にこんなのがつけてあるんだい？」と。チョール・バーザールというのは現地語で「泥棒市場」。盗んできたものか、安く仕入れたものかわからないが、とにかく、こまごまとしたありとあらゆる汚らしい雑貨を細かい路地沿いや露店で売っている市場のことだ。これをひとびとはこう呼んでいる。

このチョール（泥棒）ということばは、日本では外来語として意識されていないままに使われている。「ちよろい」とか「ちよろまかす」と

いった使われ方をして……である。多分、六世紀の仏教渡来時にインドの僧といっしょに日本に渡ってきたものであろうが……。

奈良の都に仏教といっしょにやってきたインド僧の目から見たら、日本の滝は驚き以外の何ものでもなかったことであろう。あの広大なガンジス平原にはゆつたりと流れるガンガ（英語名 ガンジス）とブツダが悟りを開こうとして苦行していた後、スジャータから乳糜にゅうび（ダヒヨーグルト）の施しを受けたことで知られているネーランジャラー河（清浄な川の意。現在の名称はパルグ河）など多くの支流があり、それを現地語ではナディ（川）と呼んでいる。このナディが一〇〇メートル以上も垂直に落ちているのを見て、「ナディだ、ナディだ。ナディが真下に向かつて落ちている」と仏教伝来時にインドからの外来僧達が叫んだのだろう。このありが

たいことばが「那智の滝」という名称になった
と考えられる。

仏教聖地はガンジス河とその支流に沿ったビ
ハール州にそのほとんどがある。ビハール州と
いう名称はビハール(寺院)から来ているよう
に、仏教四大聖地や十大聖地の多くがある。ゴ
ータマ・ブツダはこの地(現在はネパール領)
に生まれ、何年もの苦行の後、瞑想によって悟
りを開き、説教を始め布教して歩き、八〇歳を
越えて亡くなっている。この入滅を涅槃ねはんとい
うが、これはニルヴァーナの俗語ニツパーナの音
写である。

そして、ブツダが亡くなって一〇〇年くらい
すると、口授によって伝えられていたその教え
がストトラ(経。音訳は修多羅)として編纂さ
れ、さらに没後五、六世紀もすると、己の悟り
ということだけでない他利主義的な考え方の大

乗ヤナ 仏教が興ってきた。

インドの憲法ではシヤカ暦を採用している
が、ヒンディー語圏ではヴィクラム暦が好んで
使われている。この暦は太陽暦で西暦の四月中
旬ころより始まり、一年が一二月ある。この
第一月の時季はガルミー(暑中)という、モン
soon前の暑い暑い夏の季節になる。出家した
仏教修行者達はこのヴァイシャークと呼ばれる
月までにある程度の修行達成の目処をおいて
いたらしく、その後のモンスーン(雨季Ⅱヴァ
ルシヤ)に入ると遍歴による説教を中断して雨安
吾ゴ(雨季の定住)に入ってしまう。そこでヴァ
イシャークに入るとアチャリア(阿闍梨Ⅱ高僧)
やグル(先輩僧)達は日ごろの世話(セワー)
をやめて沙門(サマナ。出家僧)の修行度合を
チェックする。そのときまでに悟りの域に達し
ていない修行僧は、先学達からは「まだ、悟れ
ていないのか。娑婆シヤバ(サハー)の人間と同じ

や、お前はヴァイシャーク・モハーだな」とか
らかわれたと伝えられている。

このモハーは無明とか愚妄、愚痴、痴という
漢訳（意訳）がされている。漢訳でも音訳の方
は「馬鹿^{マハ}」という文字が当ててある。日本語で
これを読めば、むろん、バカとなる。バイシャ
ークは西暦の四月だから、一八世紀にインドを
占領した英国人は何とこのバイシャーク・モハ
ーにエプリル・フル（四月馬鹿）という訳語
を当てた。これが大英帝国の領土や国際共通語
としての英語が広がっていったのといっしょ
に、おもしろおかしく世界中に広がっていった。
私たちが何気なく使っている馬鹿とか四月馬
鹿という言葉は、このようにもともと仏教世界
で使われていたことばなのである。

五月の末ころインド洋の赤道付近に発生した
モンスーンがヒマラヤ山脈に吹き当たり、偏西

風によって流されてきて日本の梅雨^{つゆ}にもなる。

「雨期になったら、インドでは白っぽい茗荷の
花が咲いて、芽が出てくるのだろうな」と思い
起こす。そして、こんな伝説も。

ゴータマ・ブツダの弟子にチュッラパンタカ
（小道路の意味）という生まれつきもの覚えが
悪くて、自分の名前すら忘れてしまふ男がいた。
そこでブツダが杖につけた旗に名前を書き入れ
て持たせた。この男は終生これを持って歩き、
死んだ後はその墓に見知らぬシヨウガのような
草が生えてきた。つまり、ミヨウガの茎と芽が
出てきたのだ。このことからナムオサルノ（茗
荷〓名担い）と悼名をつけられ、それがもの忘
れに通じるようになったそう。

今は亡き名人落語家・古琴亭志ん生お得意の
『相模の茗荷宿』の話も、ネタは実にインドに
あったのだ。ブツダの前生物語りであるジャ
ータカ（本生話）にあったということがわかる。

ビハール州というのは二、五〇〇年も前にマ
ガダ国が栄え、ボードガヤやラージギル（旧名
ラージヤグリハ＝王舎城）、五〇ヘクターもある
ナーランダ仏教大学跡といった精神文化の豊
かさを示す遺跡が多いのに、現在は六割もの住
民が職にありつけないというインド最貧の州で
ある。首都パトナに下り立ち、市内に向かう車
内から見ても、農村部から職を求めて都市に出
てきた人、人、人といった住民達の貧しさと汚
さが目に入ってきて、それは都市の残酷さとい
うか、目を覆うばかりである。このような経済状
況のために労働運動が盛んである。街中の大き
なロータリーの中では、どこかの会社のストで
女性闘士がアジ演説をぶっている。

そのわきをラツパと太鼓の音に合わせて歌い
ながら、踊り歩いていく一行一〇人くらいに出
あった。冠婚葬祭で歌や音楽、踊りを供して村

村を巡回しながら日銭をかせいでいる、この太
鼓たたきはアンタツチャブル（原住民のこと）。

今はハリジャン＝神の子と呼ぶ）の仕事だ。こ
の喇叭は吠えたり叫ぶという意味のラヴァの音
写だし、インドの人達は太鼓の音はドウンドウ
ヴィという音でとらえている。

そういえば、阿弥陀如来根本陀羅尼という阿
弥陀仏（アマターバまたはアマターユスの音訳。
無量光または無量寿が意訳）の徳を讃える真言
の中に「アミリタ、ドウンドウヴィ、ソワレイ」
という経音が出てくる。「甘露の鼓声あるもの
よ」といって、阿弥陀如来をアムリタ（不死尊
＝甘露尊の意）として称えている。ドウンドウ
ヴィというこの音が日本語では「鼓」となつて
いるのだ。

弦楽器を爪弾く音はヴィーナとしてとらえ、
これには「琵琶」という音が当ててある。この
ヴィーナとは音楽の神様サラスヴァティ（弁財



天)が抱えている楽器のことだ。この擬音はシ
ルク・ロード経由で仏教といっしょに日本に伝
わってきている。

仏教の四大聖地や十大聖地の中で最も聖地ら
しくなっているのは、ボードガヤである。あの
マハ・ストウーパ(大塔)と呼ばれる、五二メ
ートルもあるオベリスク状のみごとな祠堂と、
ゴータマ・ブツダがディヤーナ(音訳は禪那↓
禪。意訳は静慮、定)をしてその下で悟りを開
いたといわれている菩提樹(ボーデイ・ウリク
シヤ)がある。玄奘三蔵が七世紀に訪れたとき
には、すでに今の規模の塔(ストウーパ。俗語
はトウーパで塔婆の語源)が建っていたという。
このボードガヤという地名は、悟りという意味
のボーデイと家とか居所という意味のガヤを組
み合わせた、いわば「悟りの地」という意味だ。
菩提はこのボーデイの音写になる(意訳は覚、

正覚、等覚)。ブツダというのは悟ったという意味の過去受動分詞だが、釈尊はアルファトとかアルハン（阿羅漢）という聖者の称号を受けていた。いわば、如来ニケガクということだ。

菩提樹下の宝座のまわりでは「ナモー・タッサ・バガヴァト・アラハト・サンマーサン・ブツダッサ（私は阿羅漢であり、正等覚者である、かの世の世尊を礼拝します）」と白い袈裟カ（カーシャーヤ）姿のシュリー・ランカーからの巡礼ムの口誦が聞こえてくる。幸いにもこれがパリー語の三帰依文だとわかったので、私は後ろの方でつぶやくように口誦して帰依（ナモー。音訳は南無）の気持ちを表していた。

ゴータマ・ブツダがこの樹の下で阿頼耶あらや（アローヤ。人間意識の根本のこと）を悟った、このハート型の葉をつけた菩提樹の大木は現地語ではピーパール樹と呼ばれている。ここはブツダが瞑想を求めて入ったときの森の跡であろう。

この地では健陀けんた（ガンダー）といわれる赤黄色の袈裟けさを身にまとった、タイやビルマからの剃髪した巡礼グラムも目立つ。上座部仏教チラヴァムの人達の信仰心の厚さにはかなわない。また、チベット人は五体投地キンチャをして、敬虔な祈りを捧げている。この仏願の深さにはとてもかなわない。

ボードガヤには日本寺院もある。ここの内壁がすべて紅殻べんから（ベンガル地方産の赤色の顔料）で塗ってあるのを「どうしてなのだろう？」という気持ちでしばらく見ている内に、このことばがインドから来ていることをハッと思い出した。

私たちはこの寺にお参りをし、お賽銭を上げて、金色の大きなゴータマ・ブツダの坐像に祈りをささげてきた。銅銭でも寄進ダイナしたが、このダーナの音訳が壇那ダーナのだから、施しスラのできる人が幸せだということになる。そして、このお

金を現地語でパナという。これはpanaという音になる。平安時代のプファの音だ。これが後にhの音になってハナという発音に変わる。それは昔、比叡山の僧侶が京の色町で遊んだとき、金銭のことを隠語として「波那」と呼んだのが元らしい。これで芸人らにひいきの印に送る金銭、つまり「花代」ということが生まれていく。

この寺院は瓦で葺いてあったが、これは土器を表すカッパラの音写であろう。瓦の古語は葺いらかというが、これとてイッタカという現地の俗語から来ている。

私たちはボードガヤではアショーカ・ホテルという、仏教普及の功労者アショーカ大王の名前のついたホテルに泊まっていた。このホテルを取りまいている庭園の高い樹木がすばらしい。中でもアショーカ（無憂樹）のオレンジ色

の花がガルミー（暑中）の時季になると鮮やかに咲く。あの暑さの中ではまさに憂いのない感じになるわけだ。これはゴータマ・ブツダがルンビニーのその樹の下で生れ、クシナガラクシナガラのその樹の下で亡くなったというシャーラ（沙羅の木）、正覚の樹ビール（菩提樹）とともに仏教の三大聖樹である。

このホテル周辺の木々では雀のような鳥がかわいい声で鳴いていた。もしかしたらカラヴィンカか、あの迦陵頻伽かりようびんがか……。天女ウルヴァシーのように麗しき姿で、「梅檀せんたん（チャンダナ||白檀）は双葉より芳し」といったぐあいには……。

私はこの地で仏像が彫られているのと同じ黒い砂岩のベンチに座りながら、ぼんやりとこんなことを考えていた。私達はふだん意識していないが、アイウエオ……という五十音とて、もともと梵サンスクリット語の語順なのだ。この初めの音がア

で、終りの音がんだから、亜^あ咩^んの呼吸ということばは「いっさいの」という意味になる。このア・フーンの音写は私たちの言語の基準であるだけでなく、寺門の仁王様、狛犬や獅子の相となっていることを……。

ゴータマ・ブツダは人間の生き方を見つめて実践することを悟りの主眼とし、迷信的な火の儀式を嫌った。わが国の密教の儀式で用いる護^ご摩^まはもともとアフラ・マツダの神を崇めるゾロアスター教（拜火教）のハウマから来ているのだが、古代のバラモン教で火神アグニを祭る時に火炉で優曇^{うどんげ}華（ウドンバラ）の木などの香木を焚き、供物をこの中に投げ込んだホーマ（焚焼）となり、このことばから来ている。バラモン教、ヒンドゥー教へと受けつがれてきたこの土俗的な秘法の儀式は、仏教に入ると密教に受けつがれわが国へも入ってきた。

もつとも、昔、高野^{こうや}聖^{やひじり}が「万病に効くありがたい薬」などと称してこの灰を売りつけて金品を騙し取ったことから、盗^{ぬす}つ人を護摩の灰というようになったのだが……。

痘^{あはた}痕^たということばとて、アルブダ（疱）の俗語アツブダの音写であろう。奈良時代に天然痘をあげたといっていたことだから、「仏教渡来時の俗語はずい分と残っているものだ……」との思いが巡ってくる。

私は「こんなにもインド文化が仏教の渡来といっしょに日本に入ってきているのだ、一二〇〇年も前から……。この仏教文化はどれほど人間性を豊かにしてくれたかわからない。帰国したらできるだけ早く名古屋へ行って、日泰山覚王寺へお詣りに行ってこよう」と決めていた。この寺には、一八九八年にネパール国境のピプラーワで英国の駐在官ウイリアム・ペツペによ

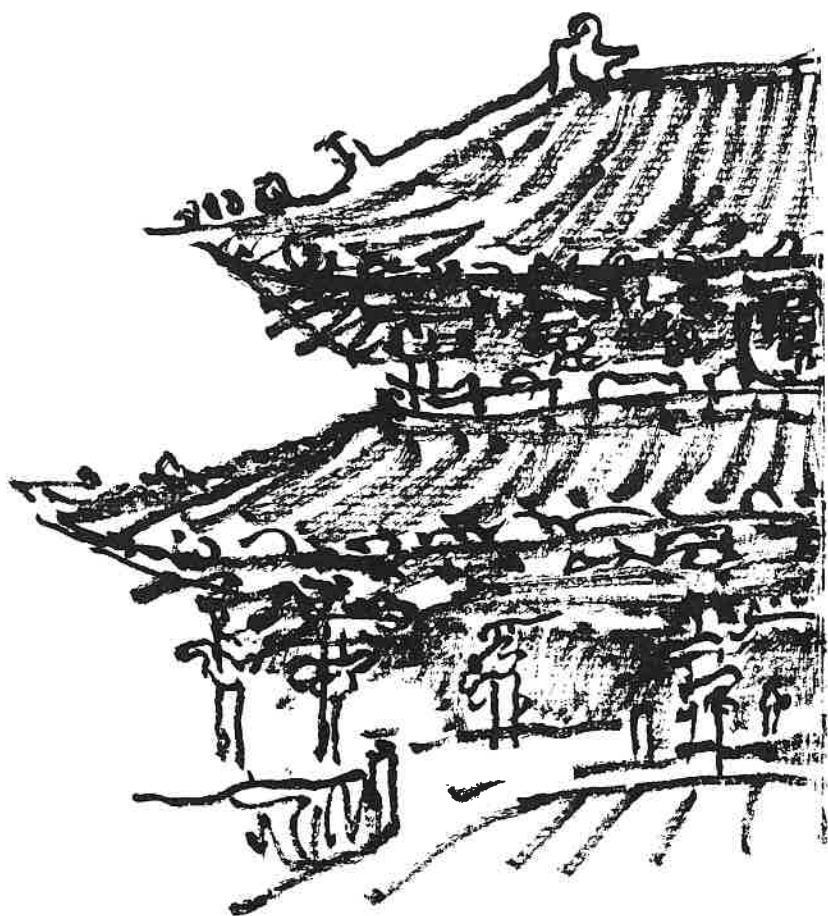


太原晉祠

聖母殿

三臺庵

七牙



って発見された、ゴータマ・ブツダのシャリラ（舍利遺骨）が納めてあるからだ。この後、訪れたカルカッタのインド博物館に飾られていたブツダの舍利器を見ながらも、この気持ちを強くしていた。

（一九九六年十月記）

〈追記〉

ボードガヤに入る三日前に、私達はシッキムの避暑地ダージリンにいた。バグドグラの空港に下り立ち、シリギリ茶の採れるシリギリの平坦地を通り、あの六一センチ幅の狭軌の登山鉄道沿いに六七キロメートル、標高差二〇〇〇メートルを低地の森林地帯（ジャンガル）を抜けて紅茶畑の中を小型バスで延々と登って行った。

かつてヒル・ステーションと呼ばれるダージリンの政庁が英国人によって置かれていた。展

望の丘」と、そこにあつて下のグームの地に移転させられたチベット仏教のサムテン・ロリン寺院を見ていて、ハタと気がついた。表記のとおり読めばドルジェという綴りをチベット語で発音したものが、ドチェという音になるし、ダージリンというのはドチェ・リンポチェ（高僧ドチェ）の英語風訛りの綴りではなからうか……と。

ここダージリンまでの七〇キロメートル近い延々とした鉄道やそれに沿った道路、ありとあらゆる斜面の紅茶園、製茶工場や街の建設工事などは英国人がネパール人労働者をつれてきて切り開いたために、この地はネパール人が六割を占めている。シッキム語を話すレプチャ人の二倍もいる。だから、土地の人の会話を聞いていると、ネパール語で話している人が多い。聞くとこの土地生まれのネパール人が多いのだそう。一九五三年、世界最高峰エヴェレスト（八、

八四八メートル)に初めて登ったテンジン・ノルゲとてこの土地生まれのシェルパ族(チベット系ネパール人)なので、ダージリン登山学校はここにあるし、その近くにテンジンの墓もある。

翌朝は暗いうちから古いランド・ローバーに乗って、タイガー・ヒル(約二、六〇〇メートル)へと登っていった。カンチェンジュンガ(八、五九八メートル)の展望台として有名なところだ。ここでは日の出と月の入りが同時に見られた。私は静岡市郊外の吐月峯柴月寺に三喜庵画伯の書が額入りで残されていたことを思い出していた。画伯が転院したことを耳にしながらも日本を発ってきたので、「これは画伯に墨絵で描いてもらいたい景色だ。早く退院してきてもらいたいなあ」と思いながら、しばらく月の入りをじいっと眺めていた。

それから気持ち切りかえて、同行したガイドの名前がラヴィ(月)なので、「おいおい、月が消えていってしまわず」とからかっていた。これはインド人がひとを誉めるのに「月の光のような安らぎ」とか、「月輪のような」ということを掛けていっていたのだ。月はふつうチャンドラというが、これは英語のキャンドル(ろうそく)とかカンデラ(光度)の語源だし、日本語のカンテラの語源でもある。月や光明を神格化した月天のことでもあるし……。

カンチェンジュンガというのは英語風の綴りであって、正しくはカンチェンゾオンガだ。つまり、チベット語でいう「偉大な雪の五つの宝庫」。これを仏教語的にいうと五大宝蔵パンチヤタルセツポということになるのだから、チベット人にとつての聖山なのである。チベット人やシェルパ族がこの山をみたとき、思わず「オン・マニ・ペメ・フム(蓮花の中に宝珠あれ)」という呪文を唱え

たくなる山なのだ。

私はこの展望台で右側の尾根を見ていながら、シッキムの首都ガントの方向を目で追っていた。かつて(一九〇二年)、外国人初の入蔵者、河川慧海師がチベットを脱出してきたニヤンラ(ニヤ峠)の方が見えるか……と。そこには今は自動車道路が通じているので、「このルートから入蔵できるのだろうか?」とも。

カンチェンゾンガを見ているうちに、インド人はこのヒマラヤの山山より遙か八万ヨージヨナ(六〇万キロメートル)上空の天上界をシユメールと考えていたことも思い返していた。ヒンドゥー教の宇宙観が仏教に取り入れられているのだ。そして、このシユメールは音訳が須弥山^{みせん}だが意識は妙高山であり、そこに住む神がインドラ(意識は帝釈天。音訳は印陀羅)だということ……。カンチェンゾンガがヒマラヤ連峯の東端の山なので、東方で仏法を守るイ

ンドラ神の伝説とも合っているし……。

町田 靖治(まちだ やすはる)

一九三八年(昭和一三年)生まれ。慶応大
学卒。(株)町田園本店店主、ヒマラヤ観光開
発(株)取締役。一九八三年、日本人として初
めてアンナプルナ山塊周囲のMTBトレッ
キングに成功。『ネパール(T・ハーゲン著、
白水社)』などの訳書あり。インド亜大陸の
文化についての資料の翻訳がライフワーク。

法隆寺金堂修正会に随喜して

明治大学助教授
駒沢女子大学講師
東方学院講師

阿部 慈園
(横浜善光寺育英会参与)



①

おしひらく おもてとびらの あひだより
はやみやたまふ みほとけのかほ
たちいでて とどろととぎす こんだうの
とびらのおとに くるるけふかな

秋艸道人・会津八一は『南京新唱』にて、法隆寺の金堂を訪ったおりの感懐をこの二首に託している。金堂の扉ははなはだ高く、広く、厚

いので、はなはだ重い。それゆえ、この扉を開き閉す音に悠古の響がある、と八一は註している（『自註鹿鳴集』新潮文庫、六二ページ）。

急に『仏教四季曆』（仮題）の刊行のはなしがつまみ、本年一月七日お正月のあいさつかたがた、絵を描いて下さる石川響先生（日展評議員・東方学院講師）を訪ねたところ、

「ならば、法隆寺の金堂修正会に会って、吉祥悔過じょうごの法要をまのあたりにしたらよいでしょう。わたしは数年前に行つて、絵をかい

たものがありますから」

といわれる。その場で法隆寺前執事長の種村大超老師に電話をされ、すぐに参拝の許可をいただいた。

②

「平成九年一月十四日午後四時三十分集合云々」の正式な来山許可状（十四日は結願けちがんで八日から始まる修正会中の一番良き日である）を持参して、当日二時すぎに宿舍の法隆寺グランドホテルに到着。三時に種村老師の御自坊である福園院を訪ねて、無理な依頼の快諾にお礼を述べて辞去する。福園院さまのお庭はよく手入れがされていて美しかった。事務所に向かう道すがらテレビ等で見たことのあるなつかしい顔が小生に近づいてきて、荷物を一つ持つという。「立松さんですね」というと「頭を坊主にしよんされましてね」と答える。一九九五年から「承仕」

という修正会の練行衆れんぎょうしゆうのアシスタントを勤めているという。わたしを今夜の練行衆の一人とまちがえてくださったらしい。事務所までいろいろ話しながら歩を進める。立松和平さんはわたしと同じ昭和二二年生まれである。

事務所で高田良信管長・大野玄妙執事長に拝問。小一時間あったので、夢殿および大宝藏殿を拝する。この秋、ドラクロアの絵といきちがいいにフランスに赴かれる百済観音の前で『延命十句観音経』を誦す。八一はこの百済観音に、

くわんおんの　せにそふあしの　ひともの
の

あさきみどりに　はるたつらしも
ほほゑみて　うつつごころに　ありたたす
くだらぼとけに　しくものぞなき

の二首を献じた（同、二三ページ）。

③

午後四時三〇分すぎ、事務所に戻って受付を
 します。ここで『法隆寺要集』（高田良信監修、
 平成八年五月法隆寺発行、八千円）を購入。修
 正会等の法要の次第がすべて収録されている。
 巻末の「般若心経ちぢ児読み」と「唯識三十頌ちぢ稚



藤谷良覚師が過悔吉祥会修正

児読み」はほほゆるませるものがある。

藤谷良覚師の今夜の吉祥過悔の法要の懇切な
 説明を拝聴したのち、夕食をいただいた。師は
 法隆寺に出家し、阪大の印哲を卒業ののち、龍
 大大学院に進まれた。小生の知人足達俊英氏（仏
 大専任講師）の後輩のよし。あぶらあげ・ほう
 れんそう・うすぎりのコブが乗ったおうどんは
 うすあじながらたいへんおいしかった。おとし
 さのあまり、残り汁をすべてのみほしたほどだ
 った。

たそがれの夕闇せまる五時四五分、金堂への
 道を二五名の参拝者は静々と歩を進める。途中
 一七六のガランドウが五〜六メートルごとに置
 かれている。なかの灯明はインドを思わせるか
 わらけの中に燃えている。

④

六時から八時まで吉祥過悔の法要が厳修され



金堂までの道に置かれたガランドウ

金堂入口



た。金堂の中は電気を全く用いず、灯明のみである。「吉祥」とは吉祥天のことで、『金光明最勝王経』の説くところにしたがって、吉祥天（ラクシユミー）と多聞天（ヴァイシユナヴァ、毘沙門天）に、国家安穩・万民豊樂・寺門興隆等を祈願する法要である。多聞天は男神であるが、女神である吉祥天が前面に出ているところが興味深い。「過悔」とはみずからの罪業を吉祥天と多聞天に懺悔し、自己の身心を清浄にすることが可能となる。

金堂の本尊は有名な止利作の釈迦三尊像（国宝、六二三年）である。灯明のうすくらがりしかしとは見えなかつたが、この釈迦三尊像に対する聖徳太子の深い祈りの念がひしひしと伝わってきた（週間朝日百科『日本の国宝』001 奈良／法隆寺1、一九九七年二月二三日発行、参照）。三尊像の前には数十の和餅が供えられ、

向かつて左に吉祥天が、右に多聞天が立たれる。練行衆（寺僧）の数は九名。十名が定員であるが、大野可圓長老の体調よろしからずとのことで空席であった。暗がりに懐中電灯を用いて『法隆寺要集』を追うも、時々ついてゆけないこともあった。声明の独特のふしまわしに、一五〇〇年の伝統の重みを感じた。藤谷師は「百済系のみではなく、のちに唐代の儀礼が混ぜられたのではないか」といわれる。

本年は牛年なので例年に比べてとりわけ丁重に穩嚴に勤められた。釈迦三尊像の後に置かれた牛玉像の中に仏の徳をシンボライズした牛玉がある。結願作法の終わったのち、導師は礼盤から下りる。高位の寺僧から順番にこの牛玉を拝み、牛玉宝印が授けられる。われわれ一般の参拝者にも牛玉札が授与された。法衆なり。

すべての行を終えた寺僧たちは、金堂を出て聖霊院に向かう。大導師は、修正会吉祥悔過の

無事修了（結願）を聖徳太子の御真前に読経をもつて報告するのである。外は、二時間のあいだに雪ならぬ雨が少しく降り、石だたみにおしめりを与え静謐にして至福、すばらしい法縁にめぐまれることになった。

5

ホテルに帰って気がついたことがひとつある。二時間の金堂外陣での灯明のススをすつて、鼻の穴が黒くくすんでいる。ティッシュペーパーでふきとつたすずに鼻をよせたら、聖徳太子の飛鳥時代のおひがかすかに感じられた。寺僧の方々は八日から十四日までの一週間、目やのどはやられはしまいかと心配になった。

金堂壁画のこともいいそえておこう。外陣からかすかに見えて、写真ではなく、おのが肉眼で見ることができたといういくばくの喜びがあった。よく知られているように、昭和二四（一

九四九）年一月二六日未明失火により壁画が焼損した。今日の壁画は再現されたものである。

アジャンター石窟寺院群の第一窟後廊左部の壁面に絵かれた「麗しの菩薩」とも呼ばれる持蓮華菩薩に匹敵・対比されるのが、法隆寺金堂再現壁画六号壁、阿弥陀浄土左脇侍の観音菩薩像および同右脇侍の勢至菩薩である。

昭和二九年金堂は無事修復落慶した。二度と火災をおこさないという誓願をこめて、翌年から「金堂壁画焼損自肅法要」が一月二六日にとめられている。

会津八一の三首を引用して、この稿を了としたい。（同六六―六七ページ）

いたづきの まくらにさめし ゆめのごと
かべゑのほとけ うすれゆくはや

ひとりきて めぐるみだうのかべのゑの
ほとけのくにも あれにけるかも

おほてらの かべのふるゑに うすれたる
ほとけのまなこ われをみまもる

〔参考文献〕

『法隆寺の四季と行事』（高田良信著 小学館）

『法隆寺の謎と秘話』（同 小学館）

『法隆寺の四季―行事と儀式』（法隆寺）



「み仏様がお見通し」

——光真寺のおばあちゃん——

大田原市 菊地展江

お好きだった梅の花の綻びを待たずに逝ってしまったわれたお寺のおばあちゃん。人々の悲しみをすべて洗い浄めるような大雪の中のお通夜のこと、やさしくてちよっぴり哀し気に見えた微笑みの遺影も、つい最近のことのようにまざまざと思い出されますのに、私たちの大切なあなたがお方が亡くなられて早くも五年有余の月日が流れ去っているのです。

自宅から幼稚園への道すがら、お会いすると必ず腰をかがめて両手を合わされ、「ご苦労様。よろしくお願ひしますね」とにこやかに語りか

けて下さったあのお姿。私にとって、それは亡き老方丈様のお気持ち、お姿と全く一心同体のものと思われるのです。私などの想像もつかぬ偉大なお仕事をされ、多くの人々の尊敬の的であり、生きるよすがとも慕われた尊いお方でありながら、決して奢りたかぶることなく、身辺のさまざまな人を区別せず親身になって下さった老方丈様の広さ、大きさ、温かさはそのままあの小柄な大奥様の中に同化され、御夫妻が全く同じ呼吸で同じ価値感で私共を見守って下さったように思います。

お若い頃に最愛の御長男が幼逝されるという大きなお悲しみの中でお地藏様へのご信仰も尚一層深められたと伺いました。

昭和五十四年二月に老僧に先立たれてからは御隠居で、大きな遺影とお位牌を前に御供養にあけていらした真摯なお姿を忘れることが出来ません。ご自分の悲しみや辛さを私共には一切お見せにならない大奥様でした。

相次いで三番目のお子様、本清さんが病気で亡くなれるという大きなご不幸に見舞われた大奥様でしたが、その時も、私共に泣いたり嘆いたりのお姿をお見せにならず耐えていらつしやいました。何事も大きな流れの中の定めごとと、悲しみはご自分の胸深くにしまわれた、奥深い静かな笑顔のみが思い出されます。

「最近の私はいつも方丈様と本清のそばにあつて守られているから淋しいとも辛いとも思わないの。本清の『のだ仏』を大切におまつりし

て拝んでいるといろいろなおしゃべりが出来て気持ちも落ち着くのよ。いつもどこかで私の気持ちをわかっていて下さる。何事もみ仏様のおはからい。と思うと心がしゃんとして明るくなるのよ。」

とおっしゃった時の大奥様のまなざしを心から美しい、と思ったものでした。

ふとした御縁から私は会津西方に西隆寺というお寺を訪ねたことがあり、一時期方丈様（遠藤大禅老師）とその奥様のお世話になったことがありました。素朴なありのままの野原の一隅のような寺院に、三十三人の美しい観音様と御老師が思いを込めて書かれたという詩がさり気なく点在している西隆寺の境内。最初に伺った時にはコスモスや萩の花が観音様の足元にゆれていて、故もなくしみじみと涙が溢れて来たのを覚えています。ビルマの戦線できびしい生死のきりぎしに立った時、しみじみと心に浮んだ



母のおもかげ、ふるさとの山川。それはそのまま観音様のみ心と悟られたという御老師のお話や風貌もさることながら、そのお側でお世話をなさる奥様のお人柄に私は強い感動を覚えたのです。本堂も庫裡も鍵をかけたことがない。いつ、どなたが立ち寄られても自由に心と体を休めていただけるようにしたい、とのお話。ゆきずりの私共にまで気軽に振舞い下さったそうめん味の忘れることは出来ません。又お話の間中、入れかわり立ち寄る村の人々が口々に「おくさん先生」「ばあちゃん先生」と呼びかけては野菜やら煮物やらを親しみをこめて置いていかれるのでした。私はこの時、うちの光真寺の大奥様のような方が、この会津の山奥のお寺にもいらっしやったことに深く感動したものでした。

その時方丈様からいただいた写真集『観世音声を限りに』はいつまでも私の宝物です。

本清さんを亡くされて御隠居にこもりがちの大奥様をおなぐさめしたくて、私は西隆寺さんからとり寄せた同じ御本をさしあげたことがありました。次の朝「久しぶりにたくさんたくさん涙を流しました。ありがたくて拝むばかり。すばらしい仏様との出会いを本当にありがとう」と本を抱いて何度もおっしゃって下さいました。どんな時にも園長先生の身を案じ、幼稚園を気遣い、私共の仕事の無事を祈って下さるこの方は、私たちにとって尊い観音様なのかもしれせん。

この写真集の中の「子恩観音」の詩を読む時、私には大奥様の他人へのやさしき、ご自分への限らない厳しきがこの子恩観音とオーバーラップしてまいります。

私かわたしになる為に
私に与えられた子供たち

片身のせまい思いをさせまいと
無気力でしょぼくれ姿

正体もないへべれけの姿

いやしげな姿も見せたくなないと

苦勞も貧しさも超えて

清く正しくふるい立つ力を

与えてくれたのは子供たち

しみじみと子の恩を思う

今まで生きて来た悦び

有難うと合掌して拝む

私が私になる為に

観音様が私の子供になつて

私のまえに現れて下さつたと

本当に私は信じています

—遠藤大禅—

お寺の大奥様。多忙を極める御住職をかげで
支えながら、たくさんのお子様を立派に育てら

れ、悲しい時も辛い時も明るく小まめにお子様
方の成長を援助されたことでしょう。

「あんなに小柄なおばあちゃんから、この屈
強な青年たちが!!」という地元の方々の讃嘆の
声を何度も耳にしておりました。お寺のこと、
お子様養育のこと、檀家の皆さんのこと、ご近
所の、お知り合いの、幼稚園のこと等々本当に
さまざまな方々に慕われ頼りにされた光真寺の
大奥様。でも私はたった一度だけ、おばあちゃ
んのお嘆きを聞いたことがあるのです。あの時
代の最高教育を受けられて日本画や刺しゅうに
相当な趣味をお持ちだったとか。

「忙しさに振りまわされる日常の中でいつか
ゆっくりと自分のやりたいことを、と夢見てい
たけど、なかなかのんびりする時期はなくて。
やつとその時が来たら目もだめ、体も言うこと
を聞かないの。情けないのよ」

と曇られたお顔もほんの一瞬で忽ちいつものお

ばあちゃんの笑顔に戻られました。でもこの事は私の胸に鋭く響いた忘れられないひとこまなのです。本当にまだまだお元気で少しはのんびりのご自分のことを楽しんでいただきたかったです。軒下の小鳥と語らい、大好きなお花を育てて日本画の腕を見せていただきたかったと思います。

お釈迦様はこのお方にたくさんの尊い使命を託されてこの下野の地に、光真寺に菩薩様としてつかわされたのでしょうか。長い人生を歩まれる中で哀しい誤解や争い事をごらんになったり、いつの時代でもそうであるように世代の違いに戸惑われた時、必ず合掌して「なにもかもみ仏様のなすがまま。良いも悪いもみ仏様がお見通し」と呟やかれたあの言葉、あの風情は私をつたない人生の大切な指針となりました。今、六十の坂をはるかに越えて幼子とのぬくもり、尽きせぬ感動に満ちた職場もそろそろ引退の時



期を迎えて切に思うことは、人を咎めず、人を恨まず、と、大奥様が私に語りかけて下さったこの言葉、この思いなのです。

入院されて最後に病院をお訪ねした時、私の手を両手でしっかりとにぎり、「ありがとうございます。皆さんのおかげで私は今極楽浄土にいます。おぜいの方々にお会い出来てそれが何より嬉しいの。忙しい貴女にまで来ていただけで本当に夢みたい。ありがとうございます」とくり返し言われたおばあちゃん。あとから来られた敦子さんに「あっちゃん、子供達は大丈夫なの？」と最愛のお孫さんへのやさしい心遣いを見せていられました。このまま、いつまでもお元気で、と祈りましたのに、最後は息子さんである現方丈様御夫妻を幼子のように「お父さん」「おかあさん」と頼りにされて、美代子夫人には「光真寺へ帰りたい。光真寺へ連れて行って」と訴えられたとか。

亡くなられてはや六年近い月日が流れ去り、この現し世の人々もお寺も、そして仕組も大きなうねりに身をまかせて変容しています。今頃は御浄土の蓮の台に身を置かれて大奥様は何を思い、下界の様子をどうごらんになつていられるのでしょうか。幸せなあの世とやらがあつてのんびりと美しい華やかな絵でも描いていられたらいいな、などと幼稚な夢を見てしまいます。

この度大奥様の思い出を、との御依頼をいただき、心の中に大切にしまつてある大好きな方のおもかげをしみじみと思い浮かべ、なつかしいふれあいのひとこまを顧みる貴重な時間をいただきました。つたない、本当に自己満足にすぎないひとりよがりの追憶文になつてしまいました。が、み仏様になられた大奥様には、私のひたすら敬慕してやまぬ気持をお見通しいただけるかな、などと考えながらペンを置きたいと存じます。

合掌



米国加州佛真寺に於ける参禅生活

横浜善光寺海外留学僧 遠藤博因



私は横浜善光寺海外留学僧のご縁をいただき米国カリフォルニア州ロサンゼルス市にあります陽光山佛真寺、「ゼン・センター・ロサンゼルス」にて参禅生活を送っております。

この禅センターは、約三十年前に前角博雄老師によって開創されました。ロサンゼルスダウンタウンから西へ約六キロ程行った地区に位置しております。住宅地と商店が混在し、近年、中南米と韓国からの多くの移民のためコリアン・タウンとも呼ばれております。

禅センターは五棟の一般住宅を改築した建物と、二棟のアパートから成っております。その

うち一つの建物は床に畳を敷き坐禅堂として使用しております。またサンガ（僧伽）ハウスと呼ばれる建物には食堂、台所、書籍や仏具の販売を行っている売店があります。さらにワークショップや初心者のための坐禅講習を行う建物があります。その他の建物と二棟のアパートに三十五名余りのメンバーが住んでおります。堂長の如元先生をはじめ、七名のスタッフがセンターの運営にあたっております。センターに住むメンバーは朝晩の坐禅に参加し、日中は生業に従事するという生活を送っています。

また土、日には午前八時半から朝課を行いそ

の後、坐禅及び堂長の如元先生による法話となります。これと平行して初心者のための坐禅講習会が行われます。この講習会では、基本的な坐禅の組み方、禅堂での作法、簡単な仏教の教えや歴史について、長く参禅経験を積んだメンバーが指導にあたっております。また毎月一度一週間の摂心会を行っております。

摂心会では、午前三時五十分の振鈴とともに起床し、三炷の暁天坐禅を行います。各坐禅ごとに経行といって両手を鳩尾（みぞおち）のところで結び、坐中の緊張や足の疲れをとるために堂内をゆっくり歩きます。この禅センターでは前角老師が臨済宗の伝統を取り入れた師家の方に参じておられたこともあり、参禅者が列をつくり敷地内を少し早歩きで経行するといったこともやっております。暁天坐禅が終わると引き続き曹洞宗の行事規範に則った朝課となります。ここでは般若心経を一日おきに日本語と英

訳のもので読誦いたします。さらに歴住諷経は参同契の英訳にて読唱しております。また檀信徒の諷経では大悲哭または延命十句観音経を読誦します。

朝課ののち、応量器を用いた坐禅堂での行鉢となります。食事の内容は食文化の違いもあり、日本のようにお粥を給仕するということはなかなか難しく、オートミールと呼ばれる麦の一種をお粥状にしたものや、グラノーラと呼ばれるこれも麦の一種の穀類に、蜂蜜や砂糖を加えてオーブンで焼きあげたもの、これに牛乳を加えて食べるといった具合であります。さらに、フルーツをさいの目に切ったものが加えられます。しかしながら、食事は禅宗の作法に則り展鉢の偈、十佛名、五観の偈を唱え、禅堂内での行鉢を行っております。

その後午前中に約二時間余りの作務を行います。食事の下準備、坐禅堂内外の清掃、建物の

修繕作業、事務所での雑務等、それぞれに役割分担し行われます。ちなみ、摂心中はたとえ休憩時間であっても、一切必要以外は言葉を交わさずに各自の修行に専念するという決まりになっております。作務が終わると十一時半から、三炷の坐禅となります。日によっては、如元先生による法話が行われます。引き続き日中諷経、坐禅堂における中食となります。この時も朝と同じように応量器をもちいての行鉢を行います。野菜をオーブンにて調理したものや、豆や玄米、麦が主食として用いられます。午後は三時より三炷の坐禅を行い引き続き晩課、薬石となります。さらに、午後七時から三炷の夜坐を行います、開枕となります。

摂心中は、一日十二炷の坐禅を行うことになり、一炷は約三十五分程ですので、一日少なくとも七時間は坐禅を組んでいることとなります。



座っているのが著者（ビバリーヒルズ クラウディー宅）

またこの禅センターの特徴としては、臨済宗の修行道場で行われている独参を取り入れている点であります。これは、坐禅中参禅修行者が堂長や師家といわれる指導者のもとへ行き、自分が取り組んでいる公案の案件を点検してもらおうというものであります。ここでは、坐禅堂に隣接してこの独参の部屋があります。参禅者は一般に職業や家庭を持つ人が大多数でありますので、個々人においての悩みや、どのように坐禅を日常生活の中で勧めていくかという相談をする機会でもあります。

一週間の月例摂心会では、平日の月曜から木曜あたりまでは、平均すると十名程の参加者ですが、週末には三十名以上の参加者となり四十単（坐禅堂での坐席）ある坐禅堂はほぼ一杯になります。またこの禅センターの参禅者にはかなり年齢、性別、職業ともに開きがあります。年齢では二十代前半から五、六十代まで、特に

この年代が多いとはいいい難く、性別では男性が六割強と少し多い感じであります。職業別では、一般の会社勤務、教師、主婦、学生、芸術家、心理カウンセラーなどと、これも一口に言い切ることができません。もう一つの特徴を挙げれば、独身者の割合が多く、既婚者でも夫婦で参禅に来るケースは少ないようであります。このあたりはアメリカの社会状況を反映しているように思われます。

私はこの禅センターにて、参禅生活を送らせていただいているご縁に感謝するとともに、これまでの先師方々の並々ならぬご尽力を痛感させられております。同時に刻一刻と変化をとげる社会において、宗教者は一体何をすべきなのか、何ができるのかということを考えさせられます。まず私は坐禅を通じてゆるぎない真の自己を確立したいと思っております。

合掌

ガングーリ先生

第十一回育英生 宇野恭章

今年も残り少なくなり、こちらインドも朝夕は少し冷え込むようになりました。暮れも押し詰まったこのご多忙な時期に私の経過をご報告申し上げるのは誠に恐縮致しますが、ようやく私も深い悲しみを乗り越えることが出来るような気がして参りました。

私は昨年から学位論文の作成に全力を注ぎ、十月までに第四章(五〇枚)、第二章(五五枚)、第一章(三六枚)の下書きを終えることが出来ました。すでに第三章(八六枚)は今年一時帰国していた時までに書き上げておりました。私の論文はそれに結論を加えた五章の構成になっ

ております。インドで初めて英語の論文を書くことになった私にとって、曲がりなりにも一つのことを続けることが出来たのは、偏にインドでの私の恩師ガングーリ先生のお陰でした。本来ガングーリ先生には毎週二回(月、木)私の部屋まで来ていただいていたのですが、私の指導教授がえていただいていたのですが、私の指導教授が学長の仕事で忙しいこともあり、昨年より私のことを心配されて論文を指導して下さっていた経緯は前にもお伝えしたと思います。そのガングーリ先生が十一月六日(水)に亡くなりました。六十三歳でした。その二日前の月曜日には

いつものようにお元気に私の部屋に來られていたにもかかわらず余りに突然でした。心不全ということでした。ご家族の話によれば、五日の夜、御手洗いで倒られたのですが、ご家族には大丈夫だと告げられ、そのまま眠られたそうです。しかし朝方容態が急変し、病院へ運ばれたときには手遅れだったようです。私は、当日の午後、指導教授のチョウドリ先生から連絡を受け一緒にご自宅まで伺い、ガングーリ先生の御遺体の前で泣き崩れました。インドではその日の内に荼毘に付します。火葬場まで御一緒させていただきました。この日ほど人の世の無常を感じさせられた日はありませんでした。

あれからもう一月以上経ちました。私も悲しんでばかりいるわけにも行かず、ガングーリ先生のご指導無しに残りの作業を続けています。本来、私の指導教授はチョウドリ先生なので論文提出に関する問題は無いのですが、相変わらず



ず忙しくされております。それでも何とか指導して下さる時間を頂いて十二月十一日、大学に論文の四千字の要約を提出しました。予定では十八日に大学でその発表をすることになっていきます。カルカッタ大学の博士課程の規則では、その発表のあと六カ月してから論文の提出資格が得られます。審査されるのはその後で恐らく、更にまた時間が必要だと思います。とにかくインドは時間がかかります。

心残りなのは、ガングーリ先生がおられる間に私が論文を大学に提出し、その後一緒にサンスクリットのテキストを読んで頂くことが出来なかったことです。本当の息子のように可愛がって頂いたガングーリ先生には、また、人生とは何であるかも教えて頂いたような気も致します。先生から指導して頂いていた日々が目に浮かびますが、感傷的になるのもうよします。ガングーリ先生は私の中でまだ生きておられる

からです。昨年は黒田先生も突然に御実兄の前角老師を亡くされどんなに心を落とされたことか、私も今回自らに省みておりました。

当面は学長業務のお忙しいチヨウドリ先生に何とかお願いして論文に関する全ての下書きを終わらせ、訂正箇所を探し出す作業を続けることになると思います。このような状況なので、もしかしたら年が明けて論文に関する作業が終わったら一時帰国することになるかもしれません。その際は宜しく御指導の程お願い申し上げます。

研究成果を挙げるのが、故ガングーリ先生、また善光寺育英会に報いる私の務めであると考え、日々精進していくつもりでおります。

合掌

一九九六年十二月十三日

私の一番好きなの、居場所

ロサンゼルス禅センター

黒川麻子

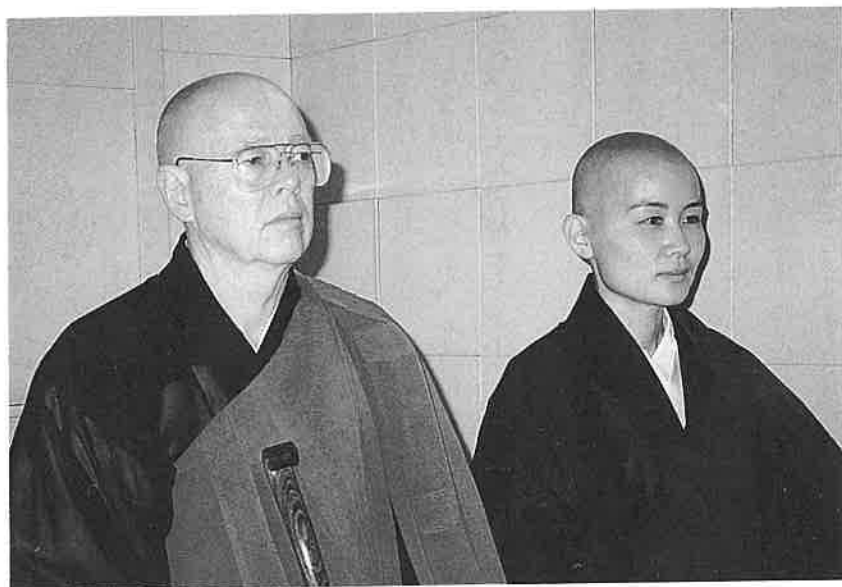
ロサンゼルス禅センターに行くには、まず少し治安の悪い地域を通らなくてはなりません。

赤信号で止まっていると、ホームレスがやってきて車の窓を洗おうとします。手を振って断つてみてもだめ、彼女は生きるために必死です。

一度朝の四時に彼女を見かけたことがあります。禅センターへの道のりには、鉄格子の家やオレンジやピーナッツを売っている露店が並んでいます。ノーマンディー通りで、右に曲がると、子

供の泣き声が赤れんがの建物からよく聞こえてきます。

左側に「ロサンゼルス禅センター」と書いてあるサインが見えてきます。ここは、私の最も好きな居場所です。サンガハウスに入ると、出来たてのコーヒーの香りの中で、新聞を読んだり、会話をしている人が、何人かいます。典座の円通（えんとう*）が、台所で料理をしている、聞かなくても私は知っています。彼女は、今朝、まだ暗いうちに起きて、私達のために、



この料理を作っているのです。オーブンからは焼かれているケーキの甘い香りがただよってきます。二階では、毎週、三日間オフィスでボランティアする玄心（げんしん*）が今日も働いています。禅堂ではシユク（*）が床ふきをしている。彼女も毎週、ボランティアで床をふきに來るのです。内庭では、ドウマン（*）が、参坐に集った人々とコーヒーを飲みながら、会話をしています。

二年前、急に前角老師が、お亡くなりになってしまい、私は心のささえを失ったような想いをしました。前角老師は、私の師僧（如元先生）の師僧であり、私自身もいろいろとお世話になった方でした。私の師僧の如元先生は一九七〇年から前角老師と修行しており、私は、先生の悲しむ姿を複雑な気持ちでうけとめました。その頃のサンガは老師の死でショックを受けており、皆バラバラの方向へと次第に別れていきま

した。新しい先生を探しにいたり、禪以外のものを捜す人もいました。私は、まるで、自分の家族を失っていくような気持ちでした。このとき如元先生は私に言いました。

「身も心も修行に励むと、何もかも、大丈夫だ、心配することはない。修行するには、坐蒲しかいらぬ。トレーラーの中でだって、修行ができる。」

如元先生の修行に対する強い信念についてゆくしかなかったのです。その年の夏、如元先生はロサンゼルス禪センターの住職になりました。

最初のうちは、私は禪センターの治安の悪さが心配でした。禅堂で坐禅を組んでいても外の騒音が気になって、なかなか落ち着けなかったのです。その頃は、まだセンターから二時間北のサンタバーバラに住んでいたため、平日にはセンターへは来ることができませんでした。平

日に如元先生以外に、たった二人、エンショウ（*）とソウリュウ（*）しか、朝の坐禅に参加する人がいなかったことが、耳に入りました。近所の環境や、治安が悪くなってゆくのと同時に、センターへ足を運ぶ人も少なくなっていたのです。如元先生が前に言ってくれた言葉を思い出しました。

「大丈夫だ、心配することはない。」

私は、先生はこの状態でも全く不満を感じていなかったのかと、不安な気持ちになりました。この中で如元先生は、朝晩の坐禅を一日も欠くことなく、こつこつと坐禅をしていました。

こうしているうちに、周囲の環境が少しずつ変わっていくように思われました。正確にいえば、私の周囲に対する見方が変わっていったのです。日曜日には、町の人々が正装して、教会へ歩いて行くことを知りました。また、周囲の人達がお互いに笑顔で挨拶を交わしているのに

気が付きました。ホームレスの女性がまだ車の窓を洗い、まだ赤れんがの建物から子供の泣き声が聞こえてきます。どうしてこのことが、私が禅センターへ行くことの足止めになろうか。私はいつも「衆生無辺誓願渡」と、となえていくに。

去年の八月、円通は赤れんがの建物へ子供たちのために、お皿にケーキを山にして持ってきました。如元先生がいつも私に「今いる所が私の修行の場である」といつてくれる言葉の意味が次第にわかっていくような気がしました。如元先生はあいも変わらず朝晩こつこつと坐禅修行に励んでいました。朝の坐禅に出る人が次第に増えていきました。今年の九月に私は家族でロサンゼルスへ引越してることが出来ました。

日曜日の禅センター、伝鐘が鳴り、私たちは禅堂へ入っていく。維那が「まかはんにゃはら

みた」と、唱えます。辺りを見まわすと温かいサンガにつつまれていることを感じ、心の中で、今もこつこつと坐禅修行をしている如元先生に合掌いたしました。

注 *は人の名前―授戒名―です。



ロサンゼルス禅センターにて



前角老師の墓地におまいり



前角宅にて

横浜善光寺留学僧育英会の第十一回総会を開催

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長、事務局―横浜市港南区日野中央一ノ一二ノ九・曹洞宗善光寺内）は第十一回総会を平成八年十一月二日午後二時から、善光寺で開催した。第十三回育英生の募集は十一月十日に論文提出が締め切られた。

総会に先だち「釈迦殿」で、阿部慈園参与（明治大学助教授）の司会により開会式が執り行われた。黒田理事長の導師で本尊上供の後、東隆眞理事（駒沢女子大学学長）が講演。宮本延雄

理事（鶴見大学理事）と来賓の曹洞宗大仙寺・一適隆信任職（埼玉県）が挨拶した。

仏教の国際性を拡大

東理事は善光寺育英会の原点を振り返り、「日本仏教は学問的に高いレベルにあるかもしれないが、教化力という点からは非常に弱いと思う。これからは優れた人材を多く育てることが大事であり、そのお手伝いができればという願いがこのように実った」と意義を語った。

また昭和六十年年度の第一回から平成八年度第十二回までに採用した育英生は七十五人にのぼり、関係国は十七カ国・一地域に及ぶと報告。

「一、二年のうちに百人を超えることになるのではないか」と話した。

さらに育英生らに対し、「二十一世紀に生きる仏教徒として、前向きの研究をしていただきたいと切に願う。これからの仏教のあり方を模索する上で参考になり刺激になる研究、これからの仏教を築くために、どうしてもやっておかなければならない研究をやっていたきたい」と要望。「インターネットの時代を迎えながら、日本仏教には国際仏教センターのような機能をもつ情報発進基地はひとつもない」とも指摘し、仏教の国際性という観点からイスラムへの関心を強めていることを明かした。

「イスラムのことを全然知らないで仏教の国際化を言うことはできない。イスラムの研究者

によると、イスラム教にとって仏教は全くの異教であり、異教徒の存在は許すことができないし、理解し合おうという考えはないという。しかし私は仏教とイスラム教の共通点から探っていききたい。そこからイスラム世界への大いなる理解を進めていきたい」と結んだ。

この後、宮本理事は「善光寺育英会は決して大きな存在ではないが、会の温かき、願いはほかの何ものにも負けないものがある。育英会の心は自未得度先度他の心だ」と挨拶し、「善光寺育英会の大ファンの一人」という一適老師は、「世界の人々が共に境界を超えて仲良くつき合うことが世界平和につながる。そのパワーの源泉は信だ。皆さんは自ら学んだことを大きなパワーにしてほしい」と期待の言葉を述べた。

育英会の前途に期待

黒田理事長は「何もないとところから寺を興し

て二十八年になる。開創十五周年で釈迦殿を建立した。仏天のご加護に報いようと、誓願の心、念ずる心で育英会を始めてから早や十一年になる。仏様の素晴らしさは三世ぶっ通しである。仏様も喜び、人々も喜ぶところに心を一つにして頑張りたいと思つてゐる」と自らの願いと決意を表明した。

最後に阿部参与は、「私は二十年以上も前に永平寺の育英金でインドへ留学した。多くの祖師方は求法の旅から弘法の旅に向かわれた。八十人に及ぶ育英生の中から、法顕や義浄にもまさる弘法の祖師が出ることを期待する」と述べて開会式を結んだ。

引き続き総会に入り、まず第十二回育英生の三上俊弘氏が、インド・マドラス大学での留学生活とヒンドゥー教の研究を通して、インド仏教の現状について卓話を行ない、出席した育

英生らが一人々々現況報告を兼ねて自己紹介と抱負を述べた。

議事は今年度行事報告、第十三回辞令交付式の日程と記念講演の件。さらに出版事業として①『成寿』二十七号を故・伊藤喜三郎顧問の特集とする②育英生の論文集第三巻を故・前角博雄顧問の特集号として出版③道元禅師生誕八百年記念事業として『道元の二十一世紀』（仮称）を上梓——などを決めた。

また役員人事で大本山總持寺の成田芳髓新貫首を名誉顧問に推戴したことが報告され、スイス・ローザンヌ大学に留学中の第十二回育英生・計良隆世氏からの要望に応えて、来年秋頃に仏書贈呈を計画していることも発表された。

贈呈仏書は『大藏經』と『正法眼蔵』、『伝光録』などになるもようである。

留学・求法・弘法の旅

——二十八人の育英生が論文を寄稿——

明治大学助教授
駒沢女子大学講師

阿部 慈園

(一)

老梅（漢名は臘梅）の香薰いまだ残る去る二月八日、横浜善光寺〓黒田武志（大圓）住職、曹洞宗〓にて第十三回留学僧辞令伝達式が厳修された。新規の久間泰賢・洪在生・山口菜生子の三氏と継続の清水晶子氏である。今回はまれに見る厳選であった。これで派遣国十七カ国（一

地域）留学僧総数が七十九名となる。もとより黒田理事長の大発願・大誓願の結晶にほかならない。

さて、昨年四月八日『横浜善光寺留学僧育英会論文集』の第二巻（発行所・成寿山善光寺、編集印刷・中外日報社）が刊行された。厳密な書評はひかえさせていただき、紹介に先立ってまず「留学」ということを考えてみたい。

(二)

留学とは、一般的に「よその国に在留して学問をすること」と定義されるが、明治以降のわが国では留学といえばもっぱら欧米に赴いて新しい文化・文物を学び取ることであった。しかし、遣隋使や遣唐使のころは中国へ渡って学習することが留学（るがく）と称された。

中村元博士の御教示であるが、弘法大師空海の詩文集『性霊集』には、二種の留学僧が記録されている。その一つは、半年から一カ年中国に留まる、いわば短期留学の還学僧（げんがくそう）。もう一つは、平均数年、長い者は二十年に及ぶ長期留学の留学僧（るがくそう）である。空海自身も留学僧の一人で、延暦二三年（八〇四）、三十一歳の時入唐し、惠果阿闍梨（けいか・あじやり）より密教の真髓を伝授されて、三年滞在の後帰朝した。

(三)

さて、留学は旅のひとつである。柳田国男は、旅は他火（たび）であり、他所の火を経験すること、つまり異郷・他界を遍歴すること、日常とは全く違った他の世界に行くことであるという。

仏教僧の旅はおおむね二つに分けられる。一つは、真実の仏法を求めて他国に赴き、経巻を求め、正師をたずね、また遍路や聖地巡礼をしてみずからの心の浄化をはかる旅である。自分が何かを学び取るための旅であるから、「求法の旅」と名づけられよう。第二は、自己が見聞し、体得したところの法（さとり・真理）を他の国の人に伝えるための旅である。これは伝道布教の意味がこめられているから「弘法の旅」と呼ぶことができよう。

求法の旅の代表は、中国から仏教発祥の地イ

インドに学び数多くの経巻・論書とともに帰国した法頭（ほっけん）・玄奘（げんじょう）・義浄（ぎじょう）である。朝鮮半島からは謙益（ギョムイク）・玄太（ヒョント）が挙げられる。弘法の旅のごく著名な仏教僧として、インドから中国へ禅を伝えた達磨（だるま・ボーディガルマ）と偉大な訳経僧のひとり真諦（しんたい）を、また中国から日本へ律を伝えた鑑真（がんじん）と黄檗宗を伝えた隠元（いんげん）を、さらに東大寺大仏開眼の導師インド僧ボーディセーナの名を挙げる事ができる。

(四)

われわれの横浜善光寺留学僧の旅は、求法の旅にほかならない。

本論集の紹介に入ろう。

巻頭言は、黒田理事長の「なぜ留学僧育英会をつくったか」。理事長の、若き日の激しき苦し



き修行・行脚で得た「生かされていること」の気づき」が善光寺の開創・発展となり、御恩報謝の人材の育成となったのである。

序文は、ともに育英会顧問をつとめられる鶴見大学学長高崎直道博士の「日本仏教の光明として」および愛知学院学院長小出忠孝博士の「代償を求めない大慈悲行」である。いずれもきわめて示唆的な御文である。

次に、第八回から第十一回までのつごう二十八名の育英生（留学僧）が論文を投じている。以下名前と論文名のみを挙げる。

第八回生分として、

渋井修「カンボジアで」、ペルキ・ローフ（大玄）「未来の仏教と私の役割」、韓仁徹「未来社会の仏教と私」、韓京愛「二十一世紀の仏教と私の役割」、落合隆「風の葬送」、李俊秀「未来社会の仏教と私」の七編。

第九回生分として、

藤田一照「禅の国際化と私の役割」、キリメテイヤネ・ヴィマラワンサ「未来社会の仏教と私」、李鐘徹「二十一世紀の仏教と私の役割」、李泰昇「未来社会の仏教と私」、スワガタン・チャクマ「未来社会の仏教と私」、佐藤誠司「国際貢献の拠り所とは何か」、薫燕燕「政界平和と仏教徒の誓願」の七編。

第十回生分として、

嘉木揚凱朝「チベット仏教の未来と僧侶の責任」、孫順鎬「留学僧として私はこれを学びたい」、金英子「社会の中で生きている仏教を」、碓雄神「異文化の中で仏教を学ぶ」、サンガ・ラタナ「世界平和と仏教徒の誓願」、脇領至「仏教僧として私はこれを学びたい」、プラ・シャーンシャイ・キッティワンソー「二十一世紀の仏教と私の役割」、デイリッップ・クラール・バルア「大乘仏教をバングラデシュへ」、王文雄「これからの国際交流と仏教の役割」の九編。

第十一回生分として、

湛如「中国仏教の発展のために」、呂鉄「現代日本仏教思想の探究を」、如玄・ノバク「禅画を通して仏教の理解を」、遠藤博因「自己の究明としての仏教」、宇野恭章「インドにおいて密教の研究を」の五編である。

いずれも意欲的な論考である。

つづいて、「育英会の歩みと将来」における、育英会常務理事の佐藤俊明老師「仏宝の本山通度寺へ」と同事事・駒沢女子大学学長の東隆眞博士「タイ王国仏教つれづれ」は、それぞれ韓国・タイ視察の詳しい調査報告であるとともに、読んで楽しい旅行記の性格も有している。

前七回までの先輩育英生五氏の寄稿論文がつづく。安井隆同「仏教における生命観」、島崎義孝「アメリカ仏教のこと覚え書き『泥中の蓮華』の人々」、山本浄月「釈迦」、藤田一照「『赤肉団の学道』ということ」、キリメティヤネ・ウィマ

ラワンサ「タイ、ミャンマー、スリランカの瞑想センター報告」。

黒田理事長・東理事の「対談・釈尊御降誕を祝う」には、釈尊の御降誕の意義とその根本精神をくみとり、それをふまえた今日の仏教の蘇生が熱っぽく語られている。

最後に「横浜善光寺育英会十二年の歩み（黒田理事長）と英文四篇（黒田武志・高崎直道・小出忠孝・東隆眞）が添えられている。

(五)

願わくば、横浜善光寺育英生七十九人の留学僧のなかから、法顕・玄奘・義浄にまさるともおとらぬ、いや彼らを越えるほどの人材が育ちあがることを心から祈念してやまない。

（上智大学講師・東方学院総務兼講師）

(目 的)

佛教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

(派 遣 先)

1. Ze (Center of Los Angeles (LA禅センター)
"923 S.Normandie Ave LA,CA,9006 USA"
2. Zen Mountain Center of New York (NY禅センター)
"Box 197,Mt.Tremper,NY 12547 USA"
3. Wat Paknam (ワットパクナム)
"Bhasichareon Bangkok 10160 Thailand"
4. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

(派遣期間)

平成10年4月より一年間

(給費)

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する必要経費並びにその往復旅費

(提出書類)

1. 論文 (次項による)

○ 論題

- ① これからの国際興隆と仏教の役割
- ② 世界平和と仏教徒の誓願
- ③ 留学僧として私はこれを学びたい
- ④ 異文化の中で仏教を学ぶ

いずれか一題を選ぶこと400字詰原稿
用紙5枚以上(A4版タテ書き)

2. 保証人と連署した願書
3. 卒業証明書
4. 履歴書
5. 推薦書
6. 健康診断書

(募集人数)

平成10年度 2～3名

平成9年12月10日、事務局必着のこと

(発 表)

平成10年1月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会

〒233 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号
TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

第 14 回 生

横浜善光寺 留学僧募集

平成10年度・1998

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。



ZENKŌJI
YOKOHAMA

横浜善光寺
留学僧育英会

新育英生三人に辞令

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長）

の第十三回育英生辞令交付式が、平成九年二月八日午後二時から善光寺で挙行された。

式典に先だち本堂で、開山棟庵白純大和尚の十九回目の年忌法要と前ロシアンゼルス禅センター主管・前角博雄大和尚の三回忌法要が江川總持寺監院の導師で営まれた。法要後、江川監院は「御開山白純大和尚様と私の父とは大学時代からの同級生だ。小さい時から関東の黒田という名前を聞いていた。白純老師も瀬戸の私の寺へ来られたことが昨日のこのように去来する。当山の方丈さんの一番上のお兄さん（栃木県大田原市・光真寺の黒田俊雄住職）と私は同

級生だ」と善光寺との因縁を語った。

また「我逢人（がほうじん）」という言葉を引き、「我れ人と逢うなり」という三文字だが、素晴らしい言葉だ。人生は出逢いが全てというが、一瞬一瞬の出逢いに日々支えられているのが私の日常だ。人と人、心と心、物と物の出逢いであり、死ぬまで我逢人です」と、出逢いの尊さを説き、「黒田老師はたくさんの仕事をしておられる。強く引きつけられる迫力は、黒田老師ならではのものだ。それを皆さんも慕っておられると思う」と黒田理事長の力量を称揚した。

引き続き辞令交付式に移り、永平寺の宮崎奕保貫首からの祝電が披露された。宮本延雄理事



開山樅庵白純大和尚年忌法要

仏祖諷經





東理事



江川老師

宮本理事



(鶴見大学学監)が育英生選考の経過を報告し、今回採用した東京大学大学院博士過程の久間泰賢氏はウィーン大学へ留学、韓国の洪在成(ホン・ジェ・ソン)氏は花園大学大学院修士課程に在学、山口菜生子氏はケンブリッジ大学に留学、またケンブリッジ大学に留学中の清水晶子氏が継続採用され、それぞれ研鑽を積んでいることが伝えられた。

黒田理事長の導師で仏祖諷経の後、育英生一人一人に黒田理事長から辞令と育英金の小切手および記念品が手渡された。この後、東隆眞理事(駒沢女子大学学長)が激励の言葉を述べ、「この育英会は、黒田方丈の若い頃の海外留学体験を踏まえて出来た。これからの僧侶は国際的でなければいけないと、仏教の活性化を願い、檀信徒の方々の御理解・協力をいただきながら継続されている。このことを充分理解して御活躍いただきたい」と育英生に選ばれた意義に目

を向けるよう喚起した。

さらに、二十一世紀を担う若い仏教学徒への期待を込めて、「人間の生き方、生きる意味を考えることが問われている。常に国際的で普遍的な視野に立ち、これからの世界人類のための仏教を学んでほしい。学のための学というものは仏教にはない。どこまでも仏の教えを学び、いかに自分のものにしていくかでなければならぬ。日本は仏教の国でなく仏教学の国だといふ、皮肉を込めた批判がある。後ろ向きの仏教学でなく、新しい、前向きの仏教を創造していく心構えを持った挑戦であってほしいと願っている。机上の学問ではいけない。明日の人類に役立つ学問に実践的に取り組んでいただきたい」と励ました。

なお、これまでに採用された育英生は七十九人にのぼる。

留学僧として私はこれを学びたい

久間泰賢

(一) 研究の動機

まず最初に、私が仏教徒として現在の研究テーマに辿り着くに至った過程を簡単に述べさせていただきます。

私は曹洞宗寺院の徒弟として生まれ、年少時からその教義に親しく接してきた。曹洞宗は「只管打坐」をその主な宗旨とし、言葉を介さぬ黙照禅の実践に重きをおく宗派である。したがってそこでは、「不立文字」―真理は言葉によつては表現され得ない―という立場が強調される。この立場はもちろんインド仏教において、すで

に存在している伝統的なものであり、その伝統を曹洞宗も忠実に受け継いでいるわけである。

しかし、言葉を用いなければ、教化活動、もつと一般的に言えば他者との交流が困難であることもまた事実である。特に現代においては、日本仏教の国際化が強く要請されており、したがって当然ながら、異文化の人々にも接触していかなければならない。このような場合に「不立文字」のみがすべてを解決することはありえないのである。

おおよそ以上のような問題意識を出発点として、私の関心は「曹洞宗と言葉」、より広義には



「仏教と言葉」という方向へ向かっていった。その後、インドにおける仏教が「言葉」による精緻な思索の体系、すなわち認識論・論理学的な体系を有していることを知り、その研究に従事することを決意した。

その際、特に関心を惹いた研究テーマは、仏教の根本教理である「諸行無常」「縁起」——これらの解釈は道元の『正法眼蔵』でも重要な問題となる——が認識論・論理学的にいかにか考察され

ているか、という問題であった。そして現在は、「諸行無常」を発展させた理論である「刹那滅論」を中心に研究を行っている。

(二) 留学の必要性について

「刹那滅論」研究において重要な意味を持つテクストは、後述の研究計画でも述べるように、インド仏教における主要な学者の一人ジュニャーナシュリーミトラ(十―十一世紀)の著作『刹那滅章』である。この著作によって「刹那滅論」は事実上完成するに至ったと学界では推定されているからである。

ただし、研究の第一次資料である『刹那滅章』のサンسكريット語写本は、ウィーン大学以外では現在入手しにくい状況にある。また、ジュニャーナシュリーミトラ研究に関しては、ウィーン大学のシュタインケルナー教授が世界的権威として認められている。これらのことを考慮

するならば、この研究はウィーン大学において行われることが最も望ましいであろう。

(三) 研究計画

〔研究題目〕

インド仏教における刹那滅論の展開

〔研究副題〕

ジュニャーナシュリーミトラの『刹那滅章』

における因果性について

〔研究計画概要〕

初期仏教以降、「諸行無常」の思想は仏教の基本教理を形成してきたが、後代に到ると、「諸行無常」の発展形態として「刹那滅論」が出現してくる。「刹那滅論」は「諸行無常」の思想が極限化・精密化されたものであり、あらゆる事物は瞬間毎に消滅しながらも存続し続けるというテーゼを持つ理論である。

この理論は、インド仏教における主要な学者

の一人であるジュニャーナシュリーミトラの著作『刹那滅章』によって完成するに到った、と学界では推定されている。しかしその重要性にもかかわらず、この著作についての研究は、いまだ十分なものとは言い難い。したがって、この著作の内容を解明する試みは、関連分野の研究の進展に大きく貢献することが期待される。

その『刹那滅章』において特に重要な論点は、刹那毎に消滅する事物には果たして因果関係が可能であるのか、という点である。もし事物が瞬間瞬間に滅しているのならば、この世において様々な現象が持続的に認識される理由が説明されねばならない。この点についてインド仏教は、インドにおける他の哲学学派と激しい論争を行い、またそのことによって「刹那滅論」の理論的完成度を高めてきた。本研究ではこの論点的を絞り、そこに見られる「刹那滅論」の発展の過程を明らかにしたい。



具体的な作業としては、まず、ウィーン大学所蔵のサンスクリット語写本を用いて、『刹那滅章』についての文献学的調査を行い、テキストの校訂を進める。その後『刹那滅章』及びそれに関連するテキストの読解を進め、論文執筆の基礎的作業を完成させる。それと並行して『刹那滅章』訳注の作成を進める。

以上の作業が完了した後、最終的に論文の執筆に入る予定である。予定されるタイムテーブルは左記の通りである。

① 『刹那滅章』のサンスクリット語写本を用いた文献学的調査

九七年九月～九七年一〇月

② 『刹那滅章』及び関連テキストの読解

九七年十一月～九八年一月

③ 『刹那滅章』訳注作成

九八年二月～九八年四月

④ 論文執筆（独語あるいは英語で）

九八年五月～九八年八月

完成した論文はウィーン大学に博士論文として提出し、博士号を取得した後、その論文をウィーン大学出版会から出版することを希望している。

久間泰賢氏経歴

一九六八年福島県生まれ。東京大学文化人類学入学。同大学インド哲学科卒業。九四年四月東京大学大学院人文社会系研究科インド哲学専攻、在学中。九五年より帝京大学非常勤講師。オーストリア・ウィーン大学留学。仏教の「諸行無常」の認識論、論理学の研究をしてきた。

宗教学と私

山口 菜生子

何故、宗教学を専攻することにしたのか、そう立ち止まって考えると、簡単に答えることが難しく、言葉につまってしまう。

個々の宗教の教えや実践への興味、また教えについての様々な解釈への興味、さらには教祖たちや教えを記した書記官たちへの興味から、教えの歴史的背景や歴史的発展などへの興味といったことが、とりあえずあげられる。また、宗教というトピックの豊かさの魅力。宗教は、その起源から問うていけば、哲学、心理学、歴史学、政治学、経済学、民俗学、文化人類学など、無限に多様な分野と繋がっていく。しかし、

宗教学を勉強しようという決め手は、私の場合、どこか別のところにあつたように思われる。

私は、家庭環境からか、個人的資質からか、子供の頃より聖書や仏典を読み、その思想や教えなどに親しんで、そこから大きな影響を受けた。余りに若い頃の影響というのはいつもそうだが、それは、考え方を左右するとかいったレベルにはとどまらない、個人の在り方そのものを規定するような、ある種の決定的体験だった。

私は、言葉によって、さらに日本語という特定の言葉によって、ものを感じ、考え、表現す



妙心在在處處
信



るといふ特定のプロセスを身につけた。そのため、言葉というものについて考えようとすると
きにも、言葉を用いずには、そうすることがで

きない。

言葉に限
らず、何
か自分を
根底から
支え、位
置づけて
いると思
われるも
のについ
て問うこ
とは、常
にこのよ
うな苛立
ちをはら

んでいる。私は、言葉によって豊かにされてい
ると同時に、言葉によって限定されてもいる。
それと同じように、私は、宗教によって豊かに
されていると同時に、宗教によって制約されて
もいる、と感じてきた。(これは、言うまでもな
く、戒律に従うことによって得られる恩恵はあ
りがたいが、戒律の厳しきは嫌であり、かとい
って、戒律に従わないで、結局は自分にそのつ
けが回ってくるのも嫌だ、といったことは違
う。)そのため、宗教のことを考えることは、い
つも一種の嫌悪感があった。

私は物心ついたときには、すでに自分を「宗
教的」だと感じていた。神様がいる、仏様が
いると、何の疑いもなく信じており、また自分は、
そのような、自分より絶対的に優れており、ど
んなことでもできる存在に支えられ、守られ、
裁かれて生きているのだと、思っていた。そし
て、自分はそうした存在に従順であることによ

ってしか生きてはいけないのだと、恐れ、おのいていた。これは、フロイトやスピノザが言うように、親子関係を超越との関係に投影したイメージだったと思う。はつきりそうではないにしろ、ともかく、超越的なものと自分との関係を、親子関係ほど単純にとらえるものがないのは、確かだろう。世界宗教の教祖たちも、超越へのそのような盲目的で無条件的な従属を教えている様子はない。しかし、この擬似親子関係を克服してからも、宗教は、私にとって何らすつきりしたものにはならなかった。

キリスト教の聖者のひとりに数えられているアッシジのフランチェスコの祈りに、こういうくだりがある。「神よ、理解できないことに耐える力をお与え下さい」。私は、理解できないもの全般を、「宗教」という言葉とそのイメージに担わせてきたと思う。もちろん、一般的な意味での宗教もその全般の中に入っている。私は、この

「理解できないもの」を、単に教養も知も及ばないというただけにとどまらない、知そのものを脅かすようなのだと捉えている。

例えば、私は（宗教を含む）異文化体験を通して、諸々の文脈に通底する全体的視点を獲得するどころか、何事にも絶対的な基準というものはないと、つくづく思い知らされてきた。また個々の宗教は「寛容」を説いていても、それぞれの宗教の教えは、わざわざそういうふうに解釈しない限りは、相容れないということも、目の当たりにしてきた。「寛容」を説く宗教が、紛争のもとになるというのも、驚くに足りないと言える。個々の文化や宗教の原理は同じで、あらわれにおいて異なるだけだと言って、ことを相対化してみても、無駄に思える。相対的姿勢も、一つの特定の立場に過ぎず、他の多くの立場に較べて優位にある理由はどこにもないからだ。矛盾を統一する決定的立場などというも

のではない。こうして、私の宗教体験は、知を深めたり拡大するより、知の基盤を一貫して失効させ続けてきた。

私は、宗教から解放されたいと、とても長いこと願ってきたと思う。それは「理解できないこと」に絶えず足場を危うくされていることに我慢がならず、それから自由になりたいという思いだった。しかし、(宗教によって、宗教を克服しようとする試みも含めて) 宗教を何とかして克服してしまおうとする、この必死の思いが、どこかで、ふと変化したのだった。この変化のきっかけは、自分が宗教や「理解できないこと」から解放される日は、恐らくやってこないだろうという、漠然とした認識だったと思う。そして、その認識は、多分、インドへの留学体験をきっかけに徐々にはつきりしたものとなった。宗教学を勉強したいと思ったのも、この頃だった。宗教から逃げる意味は、もうなかった。

宗教への知識、洞察を身につけるのに、宗教学にこだわらなければならない。大学で教わっているような宗教学に、ともかく一見したところ、何ら「精神的」なところはないし、また精神的なことを勉強する必要もない。それまで通り、哲学を勉強してもよかったし、好きな文学を勉強してもよかった。大学で勉強することに、こだわらなかつた。

しかし、私は大学で宗教学を専攻することを選んだ。自分の在り方を存在から意識のレベルに至るまでまるごと規定している宗教と呼ばれているものに、知、情、意のすべてのレベルで向き合うことを望んでいたからだと思う。この選択は、耐え難い「理解できないもの」から解放されようとするかわりに、それを受け入れていこうという気持ちの表現だった。私の選択は、儀式的役割を果たしており、いわば象徴的なものだった。

しかし、ケンブリッジ大学の神学・宗教学部在学も二年目を迎えた現在、純粋に象徴的だった私の動機が、にわかには具体性を帯びてきている。昨年一年の勉強を通して、宗教学への興味が、刺激され、深まり、生き生きとしたものになってきたのだ。

宗教学の勉強が、私にとって、「理解できないことに耐える」ための道具立てであることをやめ、耐えていくこと自体の一環となり始めていることは確かであり、これからはますますそうなり、そして長いことそうであり続けるだろう、という予感がある。

目下私は、ユダヤ、キリスト教を中心とした、宗教の歴史、文献学、宗教哲学などを、選択している。大学の勉強に加えて、ケンブリッジという国際色豊かな土地柄の恩恵に与かり、イギリスのキリスト教徒の他にも、アジアの仏教徒、西洋の仏教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒など

と知り合い、かなり親しく交流することができ、ここからも大きな収穫を得ている。これらの経験は、私に様々な文脈を覗かせてくれると同時に、自分が今まで親しんできた仏教をはじめ、日本という国の神道や、仏教的文脈一般などを見直させるきっかけにもなっている。将来は、宗教が人間の諸々の病状や悪状況に対して、どのような治癒と和解の可能性をもっているのかを、仏教をベースとして、比較宗教学、宗教哲学などの立場から考察してみたいと考えている。

山口菜生子氏経歴

一九七二年静岡県生まれ。一九九〇年東学院で中村元博士のもとで、東洋の宗教・哲学を研究、一九九二年インド・デリー大学入学。九三年デリー大中退。九五年七月イスラエル・ヘブライ大学留学。九五年十月英国ケンブリッジ大学神学・宗教学部入学。

これからの国際交流と仏教の役割

洪 在 成

仏教は印度に発生し、二つの潮流となって流
伝された。一つは、チベット、中国、韓国、日
本など極東の諸国をはじめ、東北アジア全域に
流れてきて大乘仏教圏を形成した。そして他の
一つは、いわゆる上座仏教と呼ばれる一流で、
南方仏教の諸国に伝播したのである。

これら両潮流の仏教思想と実践が、今日、洋
の東西を問わず、世界の文明を維持する大きな
支柱的役割を十分に果たしていることは言うま
でもない。

私がここで採り上げたい論題は「これからの
国際交流と仏教の役割」である。

このテーマは言い換えてみれば、今日の仏教
は果たしてその役割を十分に果たしているかど
うかの問題であり、二十一世紀の国際化時代に
向かって、新しい仏教はどのような役割を持つ
べきであるか、ということになると私は思う。

そのように考えると、ここに二つの問題が浮
かび上がる。一つは国際交流に向かつて、必要
不可欠な条件は何であるかということ、もう
一つは仏教の役割について、もっと広い視野か
ら、つまり現代宗教全体の持っている問題から
考えるなら、仏教として今日の時代に何を果た
すべきかということについて、もっと近づける

のではないかと思うのである。

先ず、現代宗教の立場から見ると、過去において宗教が人類のために肯定的に果たした役割は、「道徳の枢軸を立てること」と、「平和の文化を創造すること」であった。

この点から見れば、過去において宗教を通じての国際的な文化交流は、彼此の文化、経済、及び社会の発展に対して、至大な貢献を与えたと言えよう。特に最近、韓・日・中国間の学術交流や寺院の姉妹関係を見ても、以前よりずいぶん活性を帯びてきていることは、仏教界がよりよい国際交流のために働いている一つの証であると思う。

このような実践的方法面において、私はここで寺院間の関係を一層深めるために、もし出来るなら「受戒」を通じての交流が積極的になされることを提案したい。(例えば、具足戒の時に、七證師を各国の僧とする等)

宗教、特に仏教の究極の境地は、知識でもまた論理や儀式によって保たれるものでもない。それは「体験」によるものであると私は思う。

「受戒」、特に印度から伝えられた「八關齋」とは、支那・新羅(高麗まで)において国家的な行事であったが、それは貧富貴賤を問わず、民間に広く伝えられたという記録が見えているからである。

ともかく私は、「受戒」を通じて、世界の人類が仏教信者として一つに結ばれ、物質文明に抑えられてきた精神文明を、もう一度立て直す必要があるのではないかと信じている。

次に私は、仏教は今や教団主義を脱皮しなければならぬと考える。教団主義というものは、一つの宗教が積み重ねてきた長い伝統と歴史をベースにして、教団が自己の権威を示すことばかりに汲々とし易い。だからこそ、仏教者はその固定観念から脱皮して、他宗教の教えについ



ても、良いものは信徒たちにも説かなくてはならないし、また脱皮した立場から他の宗教者、あるいは無宗教の人たちとも人間としてのより開かれた態度で、共に対話できるような雰囲気を作りなくてはならない。

そして各宗教は、自己の教団の運営の仕方についての改善策の一つとして、それぞれが「信用金庫」のようなものを準備しておく。それを次々に発展させ、やがて他の宗教教団にまで信

用去来が叶うような状況にまでならなくてはならない。

無論そこから出来た小さな利益は、運営上の費用を除外して凡て社会奉仕の方に施す、ということは言うまでもない。

即ち、教団を脱皮した未来の宗教は、貧民老弱者・病者・障害者たちの救済のため、奉仕活動を推進できるような共同のセンターを用意しなくてはならない。

最後に、もっとも期待されるべき仏教の役割は、国際的レベルで諸宗教が協力し合えるような機構が出来て、それが世界に向かって活躍することである。

今後、世界はますます狭くなって行く。そのために今日、世界諸国の政治・経済・社会は、人類共同に向かって日進月歩の目覚ましい働きをしているのである。

この時代において、宗教と政治と科学の三者

もその関係のバランスを崩さないように注意される必要があると思う。その為にも諸宗教の国際協力機構の設立が望まれるところである。そうなった場合の仏教の役割を考えると、それらは列挙できないほど多いと思う。

巨視的なメカニズムを通じての国際情報の交流、コミュニケーションによる仏教文化の交流、国際仏教徒の視野から可能になるカウンセリングの交流をと、さまざまな点からの可能性を考えることができるであろう。

以上、手短かに延べさせていたのだが、国際交流の仏教の役割は、実際に運営・実現化するには、さまざまな難問を解決しなければならぬ。国際的に目が届くと、猫の手も借りたいだろう。だから同じ状況に陥り込まず、いつも物を新しく見る必要があると思う。

戒を通して、丸執着しない清らかな心を養成するのも、国際交流の仏教の役割に大きな一視

点になると主張したのである。

洪在成氏経歴

一九五五年韓国生まれ。一九八四年海印寺僧伽大学卒業。八四年～九〇年全国禅院安居、九一年花園大学入学、九五年同大学卒業。現在同大学文学研究科修士課程仏教学専攻二年次。仏教と民衆との接点である信行の三階教の研究を続けている。日本留学。



善光寺節分会

平成9年2月3日(月)11時







耐 寒 参 禅 会

横浜栄光道院(少林寺拳法)



節分は心新たに生きていくことを誓う日

— 善光寺節分会に因み —

平成九年二月四日

善光寺住職 黒田 武志

はじめに

本日は、善光寺で節分会を始めましてから二十八回目を迎える日でございます。あいにくの雨模様でございますが、雨もまた、私たちが生きていく上でこの上なく大切に尊い自然の恵み、ありがたいなあという気持ちでみなさまをお待ちいたしております。

今から二十八年前、昭和四十四年の十二月二日にナリスの会長さまと伊藤喜三郎先生に仲人をしていただき私は結婚し、十一月からここに住み始めました。当時、私は東京からまいりまして、すぐアメリカで修行してからこちらにきましたので、この日野の地のご事情は皆目見当がつきませんでした。知っているお方も少なく、年が明け正月を迎え、そして二月。この月ほど

のようなかたちで地域のみなさまと触れ合い、
仏さまのお話をさせていたただこうかと考えまし
た。私の実家は栃木県の大田原市というところ
でお寺をしておりますが、二月にはいつも、鬼
は外、福はうち”の節分会をしております。
それを思い出しとりあえず、どのくらいの方が
集まってくださるかばかりはわからないけれども、節
分会を行ってみようと思いました。岩間社長さ
まの自動車をお借りして、マスとダルマを三十
個借りそろえました。それが第一回目の節分会
で、私のスタートでした。あれから二十七回の
節分会を無事に終え、本日二十八回目を迎えら
れるのも、お檀家のみなさまのおかげと感謝い
たしております。

節分の意味

さて、これから“節分”というのは、いった
いどうして行われるのか、どういう意味がある

のか、そうしたことをお話したいと思えます。
節分には豆をまきますね。こうした風習が行
われるようになったのは室町時代のことによ
うで、その時代の『看聞日記』という書物に、応
永三十二年（一四二五年）、今から五百七十二
年前に豆まきをしたという記述がはじめて出て
います。鬼というと、おそろしいもの、悪いもの
というイメージがあると思いますが、本来は、
季節の変わり目にこの世に幸運をもたらしてく
れる神のように考えられていたようです。そし
て、それがだんだん、幸運を持ってくるとい
うより、この世の災いを遠く世界へ持ち去って
くれるものというふうになん少変化していきま
した。

“節分”というと、今では一般に二月三日か
四日の立春前日のことをさしますが、そもそも
季節の分かれ目のとき、立春・立夏・立秋・立
冬のことをいいます。中国の『二十四節気』で



は、冬至と夏至の間を二十四等分しています。

季節の分かれ目の中でも、これから春を迎えるという立春は、今日は寒いけれども明日からはどんどん暖かくなり、活気あふれ力沸くようなすばらしい気持ちになれる日です。みなさまに差し上げたお札に「鎮防火燭」とありますが、日頃寒さを防いだり食事のためなどに使っている火にも感謝して、今日から心新たに生きていくという祈りがこめられています。また今年^{ひょうと}は、十干でいうと、丁の年。丁というのは、草木も生い茂り、生命力あふれたすばらしい状態のこと。人の性格でいうと、人がよくやさしく、おだやかで、博識というまさに春の陽のような方が丁生まれの人です。すばらしいですね。

節分の風習について話を戻しますが、この風習のもとになったのが、「追儺^{ついな}」という悪鬼、疫病払いの行事だといわれます。慶雲三年（七〇三年）、今から一二九四年前に全国で疫病がはや

り、多くのお百姓さんが死んでしまいました。

「もう、これ以上、苦しいこと、悪いことは来ないでほしい」と、お百姓さんたちは必死の願いを、鬼を払うといういい方で表すようになっていきました。追儺式は、平安時代は宮中行事として盛んでしたが、次第に庶民のもとにうつってきて、民間の寺社の追儺として継承されていきました。その頃から追儺の意味は、国の平安を祈り、人々が食べるものに困らないように穀物が豊かに実るようにと五穀豊穰を祈るものへとなっていきました。

「福は内、鬼はうち」

節分には豆をまきますが、なぜ「豆」なのかといえますと、これは、古くから豆には邪気を払ってくれる力があるとされていたからです。「福はうち、鬼は外」といながらまくのは、邪気を払うときには大声を出す方が、鬼が退散

するという中国の故事に由来しています。

京都のある寺の節分会では、「福はうち、鬼もうち」といながら豆まきをすることで有名です。鬼もたいへんすばらしい役目をしてくれるよいものであるという考え方です。鬼は悪いものという考えで生きてきた人にとっては不思議な話ですね、ひとつ、こんな昔話をさせていただきます。

昔、あるところに三人の娘を持つお百姓さんがいました。ある日山の畑の草とりをしながら、お百姓さんはブツブツと、

「誰か草とりを手伝ってくれたら、娘の一人を嫁さんにやってもいいんだがなあ」

といました。そのとき、どこからか大きな鬼が現れて、

「聞いたぞ。三日たったら娘をもらいにくるか
らな」

と聞いて、畑の草をあつという間に取って消

えてしまったのです。さあ、たいへんです。お百姓さんは寝込んでしまいました。上の二人の娘は鬼のところへ嫁に行くのなど絶対嫌だといいましたが、心やさしい末娘は、行くといってくれました。何年かたち、娘から「子どもも大きくなったので山のうちへ泊まりにきてくれ」と便りがありました。お百姓さんが嬉しさと心配とで飛んでいきました。鬼は、お百姓さんを食べたくてしかたがなく、負けたら食べられることという条件で、なわ作り競走や石食い競争などいろいろな勝負をしかけてきました。が、すべて、娘の機転によってお百姓さんの勝ちとなりました。次の日鬼がでかけている間に、

「お父さん、ここに千里車と五百里車があります。五百里車は水の上でも走れますから、これに乗って逃げましょう」

と娘がいい、お百姓さんと、娘の子と三人逃げだしました。しかし、しばらくすると鬼と、

仲間たちが追いかけてきました。大きな川を渡っていると、鬼たちはごくごく川の水を飲みはじめ、娘たちは引き戻されそうになりました。とっさに娘は、家を出るときに持ってきた鬼の宝・いくらでもご飯が増えるという魔法のご飯べらを取り出し、鬼に向かつてそのへらで自分の尻をペンペン叩き始めました。そのおかしさに鬼は大笑い。飲んだ水をドツと吐き出し、三人は向こう岸についてそのまま逃げることをきました。

こういう昔話です。この話、たしかに鬼が悪もののように聞こえます。でも、きつとこれからこのお百姓さんは、自分の畑の草とりが嫌で楽しくないからといってブツブツ文句はいわなかったでしようし、ましてや、わが子を人にやるといった無責任な言葉も絶対いわなかったでしよう。娘と孫とそれは慈しんで育てていったことでしょう。鬼は、「悪役」「憎まれ役」に徹

してくれたと私には思えるのです。仕事に、家族に満足する本当の幸せを鬼は教えてくれたのではないでしようか。

すばらしい季節に向かっていくスタートの今、私たちは、現在の生活、人間関係、仕事関係などに不満を持って日々暮らしていないかどうか振り返ってみましよう。何千何百年と伝わり後世に受け継がれている昔話には、不孝などこの世になく、人間は生きていることがすなわち尊く素晴らしいんだよと教えてくれるような鬼の話が多く出てきます。憎まれ役をかつてくれた仏さまのようにも思えるんですね。

節分の日は、自分をふり返り、心の中の不満、不安、憎みなど暗い部分を吹き飛ばして、明日から生き生きと明るく、希望に満ちた春のような新しい気持ちで生きていきたいと思います。そんな日であると私は感じております。




読者のたより

韓国訪問
佛教交流盛んに

大本山永平寺
南澤道人老師

御尊董老師には益々御多祥にて御接化の趣 大慶至極に存じあげます。

先般 私共一同訪韓につきましては格別の御高配を賜わりました、各名利老宗師方に御紹介頂きお陰を以て、通度寺様では方丈月下宗正老師、副方丈情霞老師共に歓迎の式禮をもってお迎え頂き、又、松廣寺・佛國寺等、李先生の御案内もありすべて御丁寧な御応対を頂きました。

一重に御老師の御鳳声の賜物と有難く存じ厚く御禮申し上げます。

天候にも恵まれ東國大学では平和の祈りを大靈山法要で前座を修行して頂き、韓国の保存文化財としての声明の極致を拝聴することが出来ました。

尚今後更に両国佛教交流を盛んにしていきたいと思えますので、今後共御指導をお願い申し上げます。



留学僧育英の
聖業に感謝

横浜市

白幡憲佑(浄土宗)老師

この度は教化誌成寿秋季号
を御恵与賜わり厚礼申上げま
す。

貴師の教化への御精進につ
いては常々敬意を表しており
ました。とりわけ留学僧育英
の聖業は私共の全佛が実行せ
ねばならぬ仕事であり、貴師
の御苦勞に衷心より感謝申上
げます。成寿誌を早速に熟読
させて頂きます。

袈裟についての懸案の
発表が叶う

東京都大田区

水野弥穂子先生

成寿誌第二十六号御恵与に
あずかりましてまことに恐れ
入りました。拙稿に関しまし
ては特にお手数をおかけいた
しましたが、おかげさまで私
の袈裟についての懸案の発表
が叶いました。あつく御礼申
上げます。愛知学院は去る六
月、公開講演会に参りました
こともあり、大変親しみを持
って拝見いたしました。

貴誌の一層のご発展を心か
らお祈り申し上げます。

日本並びに米国へ旅行

台北大学元教授

葉阿月先生

黒田老師御夫妻をはじめ皆
様には相変らず御清栄にて御
活躍なさいますこと嬉しく存
じます。愚生は六月中旬から
約三カ月余、貴国並びに米国
へと旅行しました。その間に
「成寿」秋季号をご恵贈下さ
いまして心から厚くお礼を申
し上げます。勿論貴雑誌及び
貴育英会の必要文件は、当善
友会の図書室に陳列させてい
ますので、今後共どうぞ宜し
くお願い申し上げます。

成寿で知る日頃の
ご活躍の様子

東京都杉並区
長沼基之様

(立正佼成会特別顧問)

この度は「成寿」秋季号を御恵送賜り誠に有難うございました。日頃の黒田先生のご活躍の様子を知ることができました。

お袈裟特集記事から仏教徒の一人としてお袈裟の意味がわかりました。特に池沢さんの「遠山如法衣」を大禅師さまに献納のお話には私も感激しました。そして黒田先生の「足るを知る」の記事には人間として大切なことをご指導

頂き、神仏のご加護のあることを教えて頂きました。ますます御壮健で黒田先生のご活躍を期待申しあげます。

近年の袈裟研究が
まとまった如き思い

名古屋
市
川口高風先生

今般「成寿」第二十六号を恵与賜わり厚く御礼申し上げます。

愛知学院、袈裟特集があまり大変参考となります。近年の袈裟研究がまとまった如き思いです。これからゆつくりと拝読します。「成寿」誌が

仏教雑誌として活躍されんことを祈念申し上げ、更に方丈老師の御活躍も祈念申し上げます。

お袈裟の特集号に
法幸至極

島根県松江市
田中一弘様

宗門は勿論全仏教界を通しても見られない大事業を遂行していただけますことに驚嘆と敬意を表する次第であります。『中外日報』紙で『成寿』ご発刊のことを知り、「お袈裟」について勉強いたしました。贈与方お願いいたしましたところ、早速御聴許、外に、

『法燈は海を越えて』『論文集II』併せてご送付頂き、ご芳情の段厚くあつく御礼申し上げます。

『成寿』はお袈裟の特集号でお陰様で法幸至極であります。

『法燈は海を越えて』

『論文集II』

瞥見いたしました。

前者は波瀾万丈、尊老師様のご活躍ぶりが示されており、懦夫をして感奮激励せしめる底の文章に老人身体のふるえる感を覚えた次第であります。論文集は秋の夜長の楽しみに致します。なお活字が大きくてお心遣いのほどを相

偲びました。

禅堂で次女が誕生

アメリカ合衆国
藤田一照様

御無沙汰しております。予定日より十日ほど遅れて七月十七日朝六時二十八分（アメリカ東部時間）、元氣な赤ん坊が禅堂で誕生しました。体重三四一〇グラム、身長四九・五センチの女の子で真澄（ますみ）という名前を付けました。その朝の空は彼女の名前にふさわしくみごとに澄み渡っていました。リーナさんという日本語の達者なアメリカ

人の産婆さんが助産してくれ陣痛を感じてからわずかに四時間ほどで産まれました。早紀もずっと立ち会いましたが思いのほか落ち着いていて尚美（妻）の手をにぎったり背中をさすったりして彼女なりに精一杯手伝ってくれました。赤ん坊が産まれる瞬間もしっかりと見とどけ、へその緒も彼女が切りました。自宅出産を決めた時から早紀も家族の一員として妊娠・出産にきちんと関わらせたいと願っていましたからとても嬉しく思いました。

真澄は早紀が生まれた時の顔にとてもよく似ていてしつ

かりした顔つきをしています。（早くも親馬鹿！）尚美は当分静養期間をとりその間は一照が家事一般を担当します。彼は毎日オシメ洗いをしたり料理を作ったり掃除をしたりと忙しく奮闘しています。が早紀の時よりは楽しんで



（？）やっているようです。早紀はお姉さんぶりを發揮してきました。家族が増えて苦勞も喜びも一層大きくなることでしょう。工夫をしながらわれわれなりの家族を創っていきたいと思います。禅堂の仲間たちも喜んでくれていろいろ手助けしてくれています。

それでは、時節がらご自愛下さい。

千衣縫製に全力で

愛知県一宮市
久馬慧忠老師

常宿寺庵主様より貴重な御

本を頂戴しました。よく存じ上げています。よく存じ上げている方ばかりでゆつくり拝読させて頂きます。小生も一宮福田会をはじめ、今吉野福田会の千衣縫製に全力をあげています。秋には例年通りヨーロッパ福田会主催の袈裟接心に参加のため渡欧致します。「伝衣」「方服凶儀」「良寛」等提唱していますが、仲々むつかしいものです。でもとても熱心で、時間の経つのも忘れてしまいます。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

初心を
忘れがちに自身に喝

秋田県
渡辺紫山様

いつも「成寿」御恵送頂き
ありがとうございます。また、
この度は、父母の御袈裟の記
事…。初心を忘れがちに自身
に喝を入れられました。

糞掃衣を献上した老師が、
五人遷化されました。私にと
りまして、それぞれ本当に
御法愛を沢山頂いた方々で
す。朝課罷の内仏回向で毎日
お読みする以外はございませ
ん。いえ、その度に思い出す
ことは、各老師の温顔と、お

叱りの言葉の一言一言です。
皆様の益々のご健勝を心よ
りお祈り申し上げます。

小笹会様から育英金
ありがとうございました

名古屋市
ビッグ D・P・バルア様

私はバングラデシユの僧侶
で、現在愛知学院大学の大学
院文学研究科宗教学仏教学専
攻修士課程一年生です。四月
に同じバングラデシユの僧
侶、ギャナ・ラタナと一緒に
善光寺様で先生にお目にかか
りました。その時先生から成
願寺小笹会様の御紹介を頂
き、育英金の願書を頂きました

た。ありがとうございます。
六月末、成願寺小笹会様から
ご連絡を頂き、お陰様で育英
金を下さることになりました。
現在厳しい状況にありま
すので、本当に助かります。
ご報告方々心より御礼を申し
あげます。

今後とも宜しくお願い致し
ます。

知らないこと多く勉強

鎌倉市
黒田和哉様

週日は帰山先生の会に御同
席させて頂きまして光栄に存
じます。又、「成寿」秋季号を

お送り頂き有難うございます。「足るを知る」特別読物と「お袈裟」についての文章、私にとっては知らないことが多く、勉強させて頂きました。三喜庵様の表紙、挿画などもはじめて拝見しましたが、立派な書、画、感服して見るばかりです。お心にかけて頂き厚く御礼申し上げます。

悲しみの支え

横浜市
津田忠美様

毎回「成寿」をご恵贈いただきました。誠に有難うございました。忠美は一昨年四月

に永眠いたしました。

人生の終りを察知していたのでしようか。数冊の仏教に関する書物を読み、その中の一冊に「成寿」もございました。本当に安らかな眠りでした。その後、私の悲しみの支えとして読ませていただきました。お知らせが遅くなりました。

育英会の御発展と先生のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。



中国からの 留学生に期待

東京都世田谷区
吉津宜英先生

私のゼミの学生であった中国からの留学生、胡建明さんが留学僧育英会の奨学金を頂戴できることになり、心より感謝申し上げます。彼は大変菩提心の有る学生ですので、将来日本と中国との仏教の面での交流において活躍する人であると確信しております。益々のご発展をお祈り申し上げます。

調査のために
中央アジア方面へ

二鷹市
早田啓子様

成寿をお送り頂きまして誠に有難うございました。有難く拝読させていただきました。ペースで、これまでに出来ませんでしたが勉強やコンピュータなど新しいことにも首を突っ込んで始めております。

九月十五日より三週間ほど調査のために中央アジア方面へ入る予定で準備を進めております。歴史的にも仏教やイスラム教が交錯した地域で

す。帰国しましたら一度伺いたいと思っております。

前角禪が根付いて

栃木県鹿沼市
皆川広義様

『成寿』誌御恵送有難うございました。先日、アメリカ・ロスの UCLA での心理相談セミナーに一週間参加した折に、禅センターを拝登してきました。前角老師亡きあと、米人だけで摂心されており、確実に前角禪が根付いていることを感じてまいりました。

今こそ世界の仏教徒が
連帯すべき

東京都世田谷区
島津源之様

方丈様の「足るを知る」の玉文を味読させていただきました。利他行の実践により仏性が磨き出されて来ると存じますが、すべての人がこのことに気がつけば、争いのない平和な世の中になるのではないのでしょうか。

欧米には仏教信者が増えていく由ですが、今こそ世界の仏教徒が国境や宗派を越えて連帯すべきであると存じます。

◎「成寿」秋季号に寄せて、たくさんのお便り有難うございました。

★増上寺 藤堂恭俊老師

留学僧座談会 私も仏教大
学在籍当時、留学僧のお世話
を致しておりますので、と
くに興味深く拝読させて頂き
ました。

★駒澤大学教授

鈴木格禪先生

毎々の御高情厚く御礼申上
げます。お袈裟の特集、有難
いことでした。

★松戸市 石川大玄老師

黒田老師の「足るを知る」
を筆頭に愛知学院大学の記事
と、又お袈裟について宗門の
泰斗の論文等、有難く拝読し
ました。留学僧育英会や成寿
の発行と何かと大変と思いま
すが、どうぞ宗門のためは勿
論、全世界のために御奮闘し
てください。

★上智大学前教授

安齊 伸先生

特集お袈裟の「母親の一念」
で老師方にお袈裟を贈り続け
ている長野の池沢みなとさん
の御息資剛さんが、上智大
学を卒業されて吉田興山老師

のもとに出家されたことを読
ませて頂いて、池沢母子の生
き方に感動しております。

★駒澤大学教授

佐藤達玄先生

愛知学院大学の宗門におけ
る存在価値を評価した秋季号
は大変有意義なものでした。
諸先生方の御論説や留学僧の
手記感銘いたしました。釈尊
の正法普及のため尚一層の御
活躍を期待して止みません。

★横浜市 高野義郎様

愛知学院大学のこと初めて
知りました。袈裟についても
勉強させて頂きました。厚く

御礼申し上げます。小生物理について引き続き考えを進めておりますが、ギリシヤにつきましても哲学科学の面からまとめております。

★武生市 松野宗純老師

愛知学院大学についての記事は私にとって大変参考になりました。と申し上げますのは、十一月に在校生に対し講話を依頼され、丁度準備しているところでした。全く不思議な御縁と存じます。

★船橋市 久保田展弘様

「お袈裟」の特集に大変惹かれました。東先生の「日本

の和服はお袈裟の影響が極めて大きい」との指摘にも、啓発されました。

★新潟県南魚沼郡

新井勝竜老師

愛知学院大学の御紹介では知人の消息を知り、懐しい思いをしました。又お袈裟特集では、各立場からの諸説を知ることができ、編集の妙に感心いたしました。巻毎の充実、慶賀の至りに堪えません。

★長野県 小笠原隆元老師

一体どのようにしてこの大冊の寺報を編集されているのかとはるかに推察しつつ多方

面からの内容に圧倒されます。洞門寺院の夢を実現されているものと敬服いたしております。

★宇都宮市 小林 孝様

ご多忙な中で、二百頁に及ぶ取材と編集と、御苦勞のありましたことは新聞人としてよく判りました。他人のために働く、御尊兄に見習うべく心がけております。

★茅ヶ崎市 波多野収通様

伊藤喜三郎先生ご逝去の由、本号にて知りました。「すべてのは過ぎ去って行く」という言葉をかみしめて

おります。そして「全機」の意義を改めて考えております。

★東京都 林 博明先生

特集「お袈裟」について著名の先生方から、「お袈裟は仏様の心であり仏様の体である。へもし袈裟を受持せんは、仏祖正伝すべし」歴代の仏祖が正しく伝えてきたお袈裟を正しく受持しなければならぬ「貴重な教えを学び再認識し、これからの宗門のために貢献しなければと心得ています。

★東京都 島田喜久子様

特集で池沢様の「母親の一

念」拝見し、永平寺へお供させて頂いた時のことをなつかしく思い出しました。あれからもつづけていらつしやると伺い、何とすばらしいことと感服致しております。

★真岡市 村上 晃様

宗教上の難しい内容はわかりませんが、黒田先生の「足るを知る」は感銘を受けました。私も少しでも「足るを知る」人に近づきたいものと思いました。

★横浜市 土屋武彌様

八月下旬に長崎に行ったおり、成寿を旅のお供にバッグ

にしのばせ、宿泊地の平戸、佐世保、そして長崎と、ホテルでの灯火の書とさせていただきました。ゆったりとした気持で味わう「成寿」は、自宅でのそれとは趣を異にしたようです。

★茅ヶ崎市 黒田トシ様

方丈様の「足るを知る」読ませていただき、五十年を顧み、お陰様で自分の事ができる日常生活と環境の良い皆様のお力添えと感謝致しております。

★千葉市 藤田正子様

私は、故伊藤三喜庵先生の一弟子だったので、本中の先

生の御作品をとてもなつかしく拝見し、自分もこれから少しでも先生に近づこう努力したいと思っています。次号は先生の特別号だそうで今からとても楽しみにしております。

★平成八年八月三十一日付『中外日報』紙に『成寿』第二十六号の記事が掲載されましたので、一部分を紹介しませう。

— 編集部 —

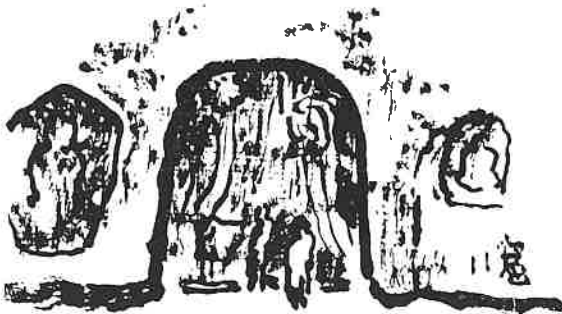
横浜市善光寺（黒田武志住職）が発行する『成寿』の内容の豊かさ重厚さには毎号圧倒される。秋季・第二十六号は愛知学院大学とお袈裟を

特集している。（中略）

全編ほぼ二〇〇頁。『成寿』は五千部印刷され、宗門内外の各方面に配られた。巻末には読者からのメッセージのこもった便りが満載されており、この印施に対する大きな反響を物語っている。

黒田住職は「足ることを知る」の文章の中で、「生まれながらに持っている、あなただけのすばらしい宝」にすべての人が早く気づいてくれることを願い、「こんなにも自分が幸せなのだから、人にも幸せを与えたいという気持ちを一一人ひとりが持てば、きっと二十一世紀には世界中から暗い

ニュース・悲惨なニュースは消えていることでしょう」と結んでいる。この願心が全編に染み渡り、それが育英会の原動力にもなっていると思われる。







地に足がついた
生き方を

横浜市 高橋明達様

先日は禅の本をいただき有難うございました。早速読ませていただきました。私には特に「修証義に学ぶ」が興味深いものでした。「いまここに生きる」ことは私にとっても課題として続いています。總持寺日曜参禅会や他の瞑想会を通して、今、ここにあることが安らぎ、心身の健康の源であり創造性をもたらしてくれる最も大切で尊いことと感じておりました。ところが、

日常の中で而今にあることは不可能とも思えたりします。先の事を心配して、不満を感じ少しもここにはいません。只管打坐は坐っていない時にも坐禅の生き方をする事だと思いますが、私のように少ない坐禅経験でしかも幸福を得たいなどと下心であっては遠い話に思えます。それでも放棄することは出来ず求めている自分がいます。生死の問題はその時が来たら自信はありませんが、霊に死はないと信じていますので気になりませんが、今生をいかに生きるか、何故こんな生き方をしてしまうのか…という所が辛いので

す。

修証義の解説をいただき理解しました。少しすつきりしました。悟りは得られるにしても死にものぐるいの結果である。日常の信仰生活の指針の修証義が懺悔滅罪 受戒入位 発願利生 行持報恩で示す内容の厳しさは私に教えてくれました。発心も無く安易に結果を得ようとするこのこと自体が問題を作っていることが分りました。今自分のできること、目標にして努力できることだけを考えるべきだと感じました。十重禁戒にはそのつもりであることが挙げられています。必要になつたら又読

はいません。これを日常に実践することだけを考えようと

思います。忘れていたり、出来なかつたことに気が付いた時には反省し静かに坐つて仏に手を合せ「忘れないように声をかけて下さい」と願い、出来た時には「見守つて下さり有難うございました」と感謝する。これだけを実行します。次の段階に今生では進めなくても問題では無いと思えます。というより考える必要は無いような気がします。今自分に出来る事、今の自分に合っている事を大切に地に足が付いた生き方をしたいと思

み返して感ずる事を実践します。

長々と大へん失礼しました。おかげ様で大きなきつかけが得られました。十戒を通して自分を見つめて行きま

黒田方丈の心意気

北海道苫小牧市

清水賢一様

たび重なるお願いを申し上げます。早くも拘らず早速お聞き届けくださいまして、『成寿』二五号をご惠贈くださいまして、たいへん有難うござ

いました。頂戴した書籍小包を勤務先から帰って開封し、息もきらずに読み始めとうとう十一時になってしまいました。

ばばこういち氏の「ある住職の壮大な実験」で、「寺を地域社会のコミュニティセンターの場所として位置付け……」に黒田方丈の心意気を感じました。また「現代仏教の在り方が厳しく問われている」という証だと感じています」といってお考えは、『中外日報』で紹介されていた、長谷川孝氏の『オウム真理教Q&A』曹洞宗の立場から」を読んで感じたこと」で「これ

に応えることで初めて、宗派としての『立場』の表明になる、と言えるように思われます」にも通ずることだと存じました。

また前角ご老師の努力によってアメリカ布教が成就したことも伺えました。どちらも心意気と努力以外の何者でもないことを十分に知らされました。東隆眞先生をはじめ、駒澤大学竹友舎の耕雲閣にいたとき副寮監としてご指導くださった鈴木格禅先生の惜別の辞も拝読いたしました。曹洞宗は本当に惜しいご老師を失ったのだと存じ、心からご冥福をお祈りいたします。

とくにお願いを申し上げた「駒沢女子大学特集」が第一回の特集であったとのこと、バスで伺ったことは何回かありましたけれども、上空からの全景写真は初めてで、その偉業を伺わせて頂きました。ほんとうに有難うございました。末筆になりましたが、貴寺のご法縁がますます流布いたしますことをお祈りいたします。

充実した誌面に敬服

茨城県つくば市

竹村牧男様

日頃御無沙汰いたし申し訳

ございません。小生、少し海外に出たいとも思っています。が、学内の事情もあって果せず、今は、毎月奈良の興福寺に二年ほど出向しなければならぬので、しばらくはじつと我慢しなければならぬと思います。やや残念に思っています。御任職様には、かつていろいろ御配慮賜り、その御厚情に深く感謝いたしております。

『成寿』ありがとうございます。充実した誌面で敬服しております。今後のさらなるご発展をひとえに祈念申しております。小生は秋月竜民先生の弟子ですが、秋月先生

は前角博雄老師をととても親密に思われているようです。かつて『中外日報』で老師の遷化のを知り、秋月先生に申し上げたとき、とても淋しそうにされていました。現在秋月先生は自宅で療養中です。

『大乘禅』では、大拙遷化三十周年を記念し、この九月号に大拙特集号を組みました。

それでは時節から呉々もご自愛専一になされますようますますの御活躍をひとえに祈念申し上げます。

「輪の光り」

神戸市 高光幸順様

早速にもお願い申しあげた要項を御送付下さりまして、誠にありがとうございます。

設立趣意書を拝読させていただき、全く自分の心の在処をそのまま写す鏡を観る思いで選びましたこの道への決意を新たとする感動を覚えております。昨年、タイ国にて卒業論文のために実施しました僧侶方へのアンケート調査で歩き回りました時に、そのお陰で親しくなることができました

タイ僧侶方とのその交流を、その種を、更にこれからは参禅を通じて育むことができたなら、という願う思いでいっぱいでございます。

また、留学僧名を拜見させていただき、カンボジアで出会ったこと、善光寺様の存在を知り、何か「輪の光り」のようなものを感じます。ありがとうございます。

また、留学僧名を拜見させていただき、カンボジアで出会ったこと、善光寺様の存在を知り、何か「輪の光り」のようなものを感じます。ありがとうございます。

時は必ずお訪ね申しあげられる懐かしい御方の御名前があり驚きました。頂きました要項の設立趣意書、目的等に、今ひとしお静かに燃えております。選考試験にかなわぬまでも、どうぞ今後とも是非とも、ご教示願ひ、何かお手伝いなり、学ばせていただく「輪」

を頂けるならばという思いしきりでございます。

まだ、ほやほやの僧侶になりたての若輩者で何も分かりませんが、こういう活動のあったこと、善光寺様の存在を知り、何か「輪の光り」のようなものを感じます。

ありがとうございます。

姑を看取つて

栃木県大田原市

磯 紀子様

ご無沙汰しております。何度ご本を頂いたことでしょうか。お礼の言葉も差し上げず失礼の限りを心よりお詫び申

し上げます。

実は私方、去る六月二十五日、磯の母を亡くしました。七年間の闘病生活でしたが、幸い子供が多く近所におりましたものですから病院に預けることもなく、自宅で看病看護ができて子供一同心残りなくあの世に出せたと自負しております。

一口に七年と言いましてもいろいろなことがありました。でも、私も生みの親同然に接することができ、毎日顔を見るのが楽しみだったのは何の力だったのだろうかと思ひながら不思議です。

亡くなる前の晩は私が泊ま

でした。戦後五十年、いつのまにか物の時代となり家の中に物が有り過ぎる今日です。二十一世紀は益々流れの速い時代に入り、心が大切になると思います。

寺に来た時は広い空、風と、清い空気をたくさん吸って、少しでも時の止った時間を作り、心の平和を寺から持ち帰られるようにと願って、お寺を守っております。

ご一緒にタイに行ってから一年経ちます。父は今も私の顔を見るとタイの話をしめます。果物の味、ホテルの庭で河風に髪をなびかせて食べたバーミナムの味、なつかしく、

今でも頭の中で味わっています。私の人生観を変えたタイ、あの穏やかで優しい人たちが大好きです。あまりに変わってしまったバンコクでしたが、チェンマイは昭和四十五年当時のバンコクの空気そのものでした。心からお礼申し上げます。ありがとうございます。

心の豊かさ

横浜市 野田忠行様

七月十七日に出発し、ドイツ、ポーランドで合気道、仏足法を伝道し、スリランカで

は占星術師の友人と再会、一週間滞在。ネパールでは五月に予定の日本舞踊団のホテルの選定や、私が個人的に設立した識字学校の視察で実に充実した時を過ごしました。ネパールにはもつと学校を作るように種々話し合いを進めてきました。貧困で学校に行けない子がなんと多数いることでしょう。日本人の役目と考え、これから一層努力したいものです。giveすれば心の豊かさをgivenされる。そうです。住職のおっしゃる心の豊かさ、ひいては仏性が磨き出されるのです。

ポカラ市にカトリック教会

が十九年前に設立され、障害児二十五名の教育にあたっています。養鶏所も発足し、一日一〇〇箇の卵生産で子供も丈夫になりました。保育園もできました。頑張りましたよ。





寒山青蓮年賦天



グループ本社ビル (横浜市・中区)

トータルに空間を
創造する企業集団



トヨタグループ技術研究所
トヨタ地球環境研究所 (横浜市都筑区)

トヨタグループ

故・伊藤三喜庵先生とゆかりある作品
(トーヨコグループ蔵)



塔



釈迦菩薩四天王



羅生門



韋駄天

伊藤三喜庵の世界
―近作とジョン万次郎挿絵展―



平成四年五月から一年半にわたり、読売新聞に掲載された小説「椿と花水木 万次郎の生涯」の挿絵原画約百点と仏画など多数の作品が展示された。

平成7年4月24日から28日の5日間、トーヨコグループ主催による「伊藤三喜庵の世界 近作とジョン万次郎挿絵展」が、本社ビル1階のトーヨコかなしんギャラリー及び2階ロビーにて行われました。初日には、オープニングパーティーが催され招待客約200人が出席しました。





トーヨコグループ代表
根本紀一

トーヨコグループは地球に優しい住環境開発グループとして、建築・土木部門、空調・エンジニアリング・防災部門、建材部門、ガス設備部門、不動産開発部門の5つの事業分野別から構成されています。グループ企業各社は、専門分野を追求（専門特化）するとともに、「環境保全」を真剣に考え、住生活環境や住生活技術の開発を推進し、幅広い分野にわたった独創的な事業を展開しています。

21世紀に向け、住生活分野で確固たる地位を築きあげ、「住」はもとより「衣・食・文化」「海外」を網羅する『ライフスタイル全般に係わる総合生活産業グループ』を目指し、積極的な企業活動を行なっています。

グループ企業総数：トーヨコ建設株式会社／株式会社トーヨコ理研
トーヨコエンジニアリング株式会社
株式会社トーヨコグループ技術研究所
グループ企業全18社

グループ総人数：2,500名

グループ売り上げ：1996年3月 1,500億円

留学育英生からのたより

スイス・ローザンヌ在住

第12回育英生 計良 龍成

黒田武志理事長様

いかがお過ごしでしょうか。私は今、大学の夏期講座に通って、フランス語を学んでおります。この秋からは博士課程に在籍することになりました。ローザンヌ大学は日本語の研究書がほとんどないのが残念ですが、研究をするのには良い環境なので満足しています。今、妻の里子と長女千尋がスイスに来ており、昨日は祝日だったので、みんなでシオン城に行って来ました。私が知らないうちに、娘は一人で歩くようになっていました。

それではまた、お便り致します。

1996年8月2日



をそろえるのにもう少し時間がかかりそうです。正式にすべての手続きが済みましたら、理事長、そして阿部先生、安藤先生に改めてご報告いたしたいと思っております。こちらの勉強も未だ終わらないうちから、結婚などというと、理事長に叱られてしまいそうですが、何としても研究と両立する覚悟でおります。

さて、私は10月26日から11月19日まで、彼女を連れて日本へ一時帰国することを計画いたしております。カザフスタン人の日本のビザ取得には2、3ヵ月かかるということで、すでにベルリンの日本領事館に申請をいたしました。その際、旅行の計画書を提出いたしました。しかし入国の日にちを遅らせる分には問題ないかと思われまます。また私どもも、どうしても10月26日に帰らなければならないということではございません。理事長のご旅行に合わせて、日程の変更をいたしたいと思っております。ただ、チケットの購入などの件もございますので、理事長のご予定がお決まりになりましたら、どうぞお早めにお知らせして頂きたい存じます。

それでは、ドイツにてお目にかかれる日を楽しみにいたしております。どうぞお身体を大切になさって下さい。ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

敬具

1996年 8月17日



留学育英生からのたより

ドイツ・ライプチヒ在住

第9回育英生 佐藤 誠司

拝復 お手紙とお写真、どうも有難うございました。理事長、阿部先生と席を共にいたし、素晴らしい日本料理を頂いたことを、大変有り難く思い、また懐かしく思い出されます。

10月に渡独の予定でいらっしゃるとのこと、楽しみにお待ちしております。こちらで用意しなければならないことなどございましたら、何なりとお申し付け下さい。出来る限りのことをいたしたいと思っております。

さて、私事で誠に恐縮ではございますが、私は只今結婚の準備をいたしております。相手はカザフスタン人の、カルリガーシュ=コルマカノワ (24歳) という学生でございます。彼女はドイツ語学、ロシア語学、ジャーナリズム学を専攻しております。カザフスタンはしばらくソビエト連邦の一部でしたので、彼女はカザフ語のほかに、ロシア語も母国語としております。ドイツ語も堪能です。カザフスタンには、ロシア人、ドイツ人、朝鮮人などが、或時は捕虜として、或時はソビエト連邦の政策によって、移入してきたそうで、人口の半分が「外国人」なのだそうです。彼女は純粋なカザフスタン人で、アジア系です。国費留学をしており、国に帰ればエリートだと言っていますが、普段は少しおっちょこちょいのかわいい女性だと思います。知り合ったのは、もう3年前になりますが、真面目に付き合い始めたのは去年の暮れからです。将来的には二人で日本に暮らすことを計画いたしております。言葉、文化的な相違など、様々な問題を二人とも少し心配しておりますが、この絆を長く守っていこうと話しております。

結婚の手続きにつきましては、お互い外国人ということで、書類

留学育英生からのたより

インド・マドラス在住

第12回育英生 三上 俊弘

黒田武志老師様

拝啓 老師におかれましてはますます御清祥のこととお喜び申し上げます。

長らくのご無沙汰、申し訳ございませんでした。おかげさまで、かような決して健康的とはいえない国に暮らしながらも、猛暑の中、病魔に冒されることもなく、研究の方も、生来の無能ばかりは如何ともし難いものの、順調に進んでおります。これもひとえに、老師をはじめとする横浜善光寺留学僧育英会関係の皆様の御加護の賜物と感謝に堪えません。

さて、このたび、今年度の日本印度学仏教学会に発表参加を申し込みましたところ、さいわい学会当局の認めるところとなり、この9月5日6日の両日に立正大学に於いて開催されます同学会第47回学術大会の場で研究発表できることになりました。老師のご厚意のおかげでこのマドラスの地で学べたことを、いささかなりともまとまった形で日本の学界に公表し、同学の諸先生のご批判を仰ぐことができることは、まことに大きな喜びです。

予定では、8月末に当地を発ち、日本へ向かうつもりでおります。日本へ帰ること自体、わたくしには、実に二年半ぶりのこととなります。そこで、この機会に、奨学金贈呈式においては愚弟の出席で失礼してしまいましたことをお詫び申し上げるためにも、老師に直接お目にかかり、御礼と感謝の気持ちをお伝えしたく存じております。まず何よりこのたびの帰国のこと老師にお伝えしたく、筆をとった次第です。

末筆ながら、老師の御健康と横浜善光寺留学僧育英会のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。 敬具

1996年8月10日

留学育英生からのたより

日本 在住

第12回育英生 ナーラダ・ラブガマ

拝啓

黒田武志先生はじめ、皆様お元気でしょうか。

このたびは私のために大切な奨学金を下さいまして本当にありがとうございました。

日本に留学して勉学に励もうと意気込んで参りましたが、スリランカと文化習慣のまったく違う中で生活しながら勉強していくことがどれほど大変なことか、身にしみて実感しております。多くの留学生在が同様に経済面で苦学しております。

私は日本に来てあてもなく困惑していた時、御寺の奨学金を幸運にも受けられるようになり、本当に助かりました。この奨学金がなかったら志途中で帰国していたかもしれません。御寺の慈悲に心から感謝しています。今後はなおいっそう精進して勉学に励むつもりです。私はもう一年日本で勉強するつもりです。世の中の困っている多くの学生にこの私の慈悲を与えて下さい。きっと仏教の発展にもつながっていくと思います。

これからも宜しくお導き下さいますようお願い申し上げます。

皆様のご多幸を心よりお祈り申し上げます。

敬具

1996年8月31日

留学育英生からのたより

イギリス・ケンブリッジ在住

第12回育英生 清水 晶子

黒田武志理事長先生

御無沙汰申し上げますが、理事長先生にはお変わりなくお過ごしのことと存じ上げます。

9月、10月とケンブリッジでは晴天が続き、暖かで穏やかな秋を楽しんでおりましたが、この2、3日、北海から冷たい風が吹き込んで、冬に向けて季節の足どりが一気に早まったように感じられます。

さて、私事になりますが留学のご報告を申し上げます。昨年10月社会人類学科のMphilコースに入学し、学期中は講義と平行して2週間毎に一本のエッセイ（小論文）を提出し、スーパーヴィジョン（個人指導）を受けました。その他にコースワークとして4月末に六千語の課題論文をまとめ、6月には各3時間の筆記試験を二科目受験し、8月末にジャイナ教の儀礼に関する一万語の論文を提出して全課程を終了しました。10月半ばに正式にDepartmentよりMphilコースに合格した旨通知を受け取りました。一年間を振り返ってみますと、いつも快く手助けしてくれたクラスメイトやカレッジの友人たちのお陰で、Mphilのコースを乗切ることができたと感謝致しております。

世界各国から集まった学生たちの中で、良き友に恵まれて学ぶことができたことの幸せを感じております。

この留学をご援助して下さいました横浜善光寺の育英会の皆様に心より御礼申し上げます。どうもありがとうございました。今後共どうぞ宜しくご指導賜りますようお願い申し上げます。

1996年11月1日



ご寄付御札

△育英会寄付▽

江川 辰三殿(大本山 總持寺) 百万円
 榑トーヨコグループ 殿 百万円
 長田 正美殿 百万円
 寺村 久義殿(株式会社 寺村屋) 五十万円
 阿部 慈園殿(黙仙寺) 五十万円
 岡田 哲道殿(良長院) 十万円
 山本 勇一殿(三樂建設) 十万円
 守屋 勇治殿 十万円
 宮林 昭彦殿(大光院) 十万円
 越石商店 殿 十万円
 細井 勉殿 十万円
 山本 浄月殿(退耕院) 十万円
 高橋 孝一殿 五万円
 安藤 康哉殿(潮音寺) 五万円
 池田 耕三殿 五万円
 松田 亮三殿(円応院) 五万円

柳下葬儀社殿 五万円
 宮田 林産殿 五万円
 滝沢 孝子殿 四万八千円
 横浜藤興会殿 三万円
 東郷 敏殿 三万円
 石川 大玄殿 三万円
 松本 敏昭殿 三万円
 石川 征一殿 三万円
 山口今朝雪殿 三万円
 伊藤 文雄殿 三万円
 平塚 隆光殿(光性寺) 三万円
 瀬之間和仁殿 三万円
 岩波 道俊殿(福泉寺) 三万円
 芦辺 鎌禅殿(耕雲寺) 三万円
 柴田 秀晃殿(長泉寺) 三万円
 松沼 正雄殿 三万円
 高橋 鐵弦殿(金剛寺) 三万円
 新館 杲殿 一万円
 村上 博中殿 一万円
 平野かよ子殿 一万円

伴 信夫殿 一万円
 瀧澤 武雄殿 一万円
 柿沼 幸子殿 一万円
 黒河内貞子殿 一万円
 岩井 文字殿 一万円
 木村 克之殿 一万円
 國広 敏郎殿 一万円
 津島八重子殿 一万円
 珍田末四郎殿 一万円
 福田 道子殿 一万円
 園部 逸夫殿 一万円
 吉田 正雄殿 一万円
 町田 靖治殿 一万円
 中村 定典殿(延命寺) 一万円
 工藤いちの殿 一万円
 木村 寅雄殿 一万円
 津田 茂殿 五千円
 藤田 正子殿 五千円

△成壽賛助▽

阿部 慈園殿
宮本 延雄殿
黒田 トシ殿
百田 行雄殿(向陽寺)
安藤 康哉殿(潮音寺)
河野富美恵殿
石川 孝禅殿
内田 京子殿
鳥屋原百合子殿
吉井 利江殿

十
万
円
四
万
円
二
万
円
二
万
円
一
万
円
一
万
円
一
万
円
一
万
円
五
千
円



Foreword

It is only three years left before 21st century. Last autumn a department store and a shopping mall were completed around new Kamiooka station,so that our hometown has changed better to live, and also it became very useful for worshippers to Hino-kōen graveyard and Zenkoji temple. In addition to that, the plan is announced to hold the Olympic game at Yokohama in 2008, we have a lot of happy news these days.

By the way,this volume of Seiju has put together a special issue on the late Mr. Kisaburo Ito(Sankian). He devoted to architectonic society in Japan as a president of Ito Zenzaburo Architectionic Office, and as a honorary president of the Assosiation of Tokyo architectonic companies. He was also a chairman of Japanese painting circles(Nihon Jiyuu Gadan)and a vice chairman of the Southern School of painting circle. He was awarded the prize of the Minister of Education. He had also drawn illustrations for “Camellia and Dogwood”, a novel which had been published serially in Yomiuri Shinbun newspaper

from 1991 to 1993, and stood high in public estimation.

He also, as a chief supportor of our temple, made a plan for Shakkaden hall of Zenkoji temple for the eternal prosperity of Buddhism and of our temple, and had drawn illustrations for Seiju for a long time.

Mr. Ito, in his life time, tried to endeavor and apply himself to live by expressing his real state and feeling without any arms. He was affluent but not stingy, wealthy but not arrogant. He lived pure life like Buddha. I believe it was completed life as a human being.

Yō Tsumoto, the author of “Camellia and Dogwood” said about Mr.Ito, “His illustrations reflected himself. People who saw them was spurred to creativity and thought as if they were in the world of his illustrations. Quiet, but dignified atmosphere they had.”

Zenkoji temple must try to bccome a temple of 21st century, hoping prosperity of Buddhism and of world peace, giving people hopes for the bright future.

編集後記

▼「成寿」第二十七巻をお送りいたします。本号は昨年三月に逝去された伊藤三喜庵先生の特集号といたしました。黒田方丈と伊藤先生のご縁

は本誌「かけがえのない人生の父」の中で方丈が述べておりますが、長い間善光寺檀頭を努められ、成寿誌には毎号表紙絵やカットをお描き下さいました。厚く御礼申し上げます。▼また、先生が懇意にしておられたトヨコグループ様が所蔵されている作品もグラビアで紹介させていただきます。

▼特別寄稿の伊藤博・伊藤宣先生の「インド石窟の旅」と、特別読物の町田靖治氏「日本語化したインドのことば」は、ともにインドに関する味わい深い内容で、インドの奥深さと日本とインドの関わりを改めて認識させられます。ありがとうございます。

▼阿部慈園先生の「法隆寺金堂修正会に随喜して」、また、菊地展江様の「光真寺のおばあちゃん」、又育英生の留学報告等の文章を掲載いたしました。

▼善光寺留学僧育英会では第十三回育英生三人が決定しました。育英生の皆さまには健康に充分留意され、本来の目的を達成されますよう祈念申し上げます。

▼方丈は檀務に多忙の中、講演を依頼されることも多く、昨秋には「よこはまメモワールさろん」で、「今、あなたは幸せですか？ 豊かな人生を」と題して講演。今年一月十四日、富山県小矢部市教育委員会主催で「心やわらかに今を生きる」と題して講演し、多くの方々に感銘を与え喜ばれました。▼四月六日の早朝、日本テレビ・宗教の時間「己を捨ててこそーわが修行時代の原点」に出演しました。▼善光寺で参禅するボーイスカウ

ト、ガールスカウト又少林寺拳法の皆さんの様子を、グラビアで紹介しました。

▼善光寺夏季行事をご案内申し上げます。

六月二十七日(初盆) 大施食法会

二十八日

七月十三日～十六日 棚経(お盆供養)

七月二十三日・二十四日

大田原光真寺参拝旅行

皆様御参拝御参加下さいませ。

▼多くの方々からお便りを頂き厚く御礼申し上げます。

▼日々御仏みほとけやご先祖様と共にあるくらしを大切にしたいものです。

成寿 第二十七巻

平成九年五月一日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央一丁目十二番九号

電話 〇四五(八四五)一三七一

FAX 〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 神奈川新聞社出版局



三時菴





横浜善光寺